

明洪武刊『遼史』版本考

大 竹 昌 巳

1 はじめに

元末の順帝（トゴン＝テムル）至正3年（1343）3月、遼、金、宋三史の纂修を命ずる詔が発せられ、時の中書右丞相トクトア（脱脱、托克托）を都總裁として編纂が進められることが決まった。翌4年（1344）3月、本紀30巻、志32巻、表8巻、列傳46巻の計116巻から成る『遼史』が完成、同年10月には『金史』135巻、翌5年（1345）11月には『宋史』496巻が完成した。『遼史』と『金史』は至正5年に江浙行省杭州路で開板され、僅かに100部が印刷されたという。世にいう「至正刊本」である。

現存する『遼史』諸刊本の中で、明代中葉の嘉靖8年（1529）に南京國子監で刊刻されたいわゆる「南監本」以前の刊本として知られるものは、僅かに1種類しかない。そこで、20世紀の前半頃までは、その刊本を指して「元刊本」「至正刊本」と呼んだ。

民國19年（1930）に第1期として『漢書』が刊行された上海商務印書館の「百衲本二十四史」（しばしば単に「百衲本」と通稱される）は、同館の董事長である張元濟（1867-1959）の主導の下、正史（二十四史）のテキストを能うかぎりの善本によって影印出版することを目指した出版事業であり、民國26年（1937）の第7期までの間に二十四史すべての刊行を完了した。このうち『遼史』は民國20年（1931）8月刊行の第2期中の一種として上梓されたが、その影印底本として選ばれたのも、近代の人々が「元至正刊本」と呼んだその刊本であった。

この刊本について張元濟はその百衲本『遼史』跋および著書『校史隨筆』（1938年刊）「遼史・元刊本疑非初刻」の中で、この刊本の字體や版心に刻される刻工姓名が至正初刻本『金史』とは全く異なり、かえってその覆刻本の『金史』と一致することを見出し、この刊本が決して至正初刻本たりえないことを指摘した。ただ、張元濟はその『金史』覆刻本の成立年代を元末（至正年間、1341-70）と看做したので、「百衲本二十四史」

ではこの『遼史』刊本のことも（至正5年初刻本ではない）「元至正刊本」と看做し、そう呼んでいる。

一方で、その同時代に國立北平圖書館（現中國國家圖書館）の趙萬里（1905-80）は、百衲本『遼史』の影印底本と同版で、以前は「元刊本」と表記されていた同館所蔵本を「明初刻本」に審定しなおした（民國22年（1933）刊『國立北平圖書館善本書目』卷2史部・正史類）。また、日本では長澤規矩也（1902-80）が明洪武8年（1375）の記をもつ『韻府群玉』と『遼史』『金史』等の刻工姓名が共通することから、「現存遼史及び覆刻本の金史は、元刊本ではなく、洪武刊本らしい。」という結論に至った（長澤1942）。さらに阿部隆一（1917-83）は、『遼史』と刻工名が共通する『金史』や『古史』について、洪武23年（1390）に福建で刊刻が行なわれたことを示す文献記述を見出した¹⁾（阿部1983: 238-239）。これらの研究の結果、今日では百衲本の底本をはじめとする現存最古の『遼史』刊本は明洪武年間（1368-98）後期に福建で刊刻された元至正刊本の覆刻本だとみなされるようになった（尾崎1982, 1985, 1989: 146-154, 577-579）。

ところで、百衲本『遼史』は刊行後、『遼史』の最も信頼のおけるテキストとしての地位を確立し、1974年に出版された中華書局の點校本二十四史『遼史』ではその「工作本」となり、2016年に同じく中華書局から出版された點校本二十四史修訂本『遼史』でも底本として採用されている。現代の研究者のほとんどが中華書局點校本とその修訂本を利用して研究を行なっていることに鑑みれば、その底本である百衲本『遼史』の影響力には隠然たるものがあると言える。

その一方で、百衲本『遼史』の影印底本が同版本である明洪武刊諸本の中でどのような位置づけにあるかということは従来ほとんど等閑に付されてきた。そもそも、洪武刊諸本の間はどういった差異があるかということ自体が、個別具体的に追究されることがほとんどなかった。そこで本稿では、現存する『遼史』洪武刊諸本について網羅的に記述し（第2節）、調査可能な範囲で版本上の比較を行なって諸本間の新古関係

1) [明] 胡廣『大明太祖高皇帝實錄』卷206 洪武二十三年十二月甲戌條ほか諸書に見える以下の記述：「福建布政使司進『南唐書』、『金史』、蘇轍『古史』。初，上命禮部遣使購天下遺書，令書坊刊行。至是，三書先成進之。」

を明らかにする（第3節）。また、關聯する問題として『遼史』首卷「遼史目錄」の構成順序について論じ（第4節）、百衲本『遼史』の影印底本の問題についても論じる（第5節）²⁾。

2 洪武刊本の現存諸本

2.1 現存洪武刊本一覽

筆者が所在を確認できた洪武刊本は以下の表に示す16種である。

〔表1〕明洪武刊『遼史』現存諸本一覽

#	本稿略稱	現藏者	主な舊藏者	冊數	存卷	備考
1	平圖甲本	臺灣故宮博物院	清內閣大庫	8	88	存卷1-47, 58-98
2	平圖乙本	中國國家圖書館	〃	8	55	存卷31-44, 49-62, 71-97
3	平圖丙本	〃	〃	9	97	存卷1-56, 58-98
4	平圖丁本	臺灣故宮博物院	〃	13	81	存卷1-7, 24-44, 49-101
5	平圖戊本	中國國家圖書館	〃	7	72	存卷1-44, 63-90
6	平圖己本	〃	〃	3	33	存卷1-11, 25-36, 69-78
7	—	中國國家圖書館	未詳	1	1	僅存卷45
8	翁本	中國國家圖書館	常熟翁氏	24	116	
9	瞿本	〃	常熟瞿氏	8	116	
10	張本	〃	上海涵芬樓	24	116	卷47鈔配
11	上圖本	中國上海圖書館	李廷相	32	116	卷71-75鈔配
12	天理本	日本天理圖書館	傅增湘	23	115	缺卷100, 卷101-113鈔配
13	靜嘉堂本	日本靜嘉堂文庫	陸心源	10	116	
14	重圖本	中國重慶圖書館	繆荃孫	24	116	
15	南圖本	中國南京圖書館	錢塘丁氏	27	99	存卷18-116
16	晉博本	中國山西博物院	傅增湘	8	16	存卷31-46

このうち、臺灣の國立故宮博物院書畫文獻處に現藏される#1と#4は臺灣國家圖書館公式ウェブサイト内の「古籍與特藏文獻資源」³⁾で、中國國家圖書館に現藏される

2) 本稿は2023年3月12日に第23回遼金西夏史研究會大會で行なった口頭發表「『遼史』版本考——明洪武刊本を中心に」の一部分に基づく。口頭發表では時間と準備の都合で省略せざるをえなかった部分について大幅な加筆を行なった。

3) <https://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch> [最終アクセス2023年10月31日]

#2, 3, 5-10 は同館公式ウェブサイト内の「中華古籍資源庫」⁴⁾で、それぞれマイクロフィルムの電子化画像が公開されており、モノクロではあるがオンラインで全文を閲覧することができる（#1の電子化画像は後者でも閲覧可能）。その他の諸本は現時点でオンライン公開されていない。目下、筆者の調査材料はこれらの電子化資料と各種目録類の著録や書影に限定されるが、以下では、その調査範囲内で判明している現存洪武刊諸本の基礎情報について概観する。なお、1巻のみを存する#7は詳細不明のため調査対象としない。

2.2 舊國立北平圖書館藏諸本

2.2.1 北平圖書館時代の所蔵状況

現在では臺北と北京とに分かれて所蔵される6種の洪武刊本（表1の#1-6；いずれも残本）は、民國期にはすべて北京（日本占領下の1937-45年間を除く1928-49年間には北平と改稱）に所在した。清末の宣統元年（1909）に清の學部の上奏で設立された京師圖書館は、民國元年（1912）に民國政府の下で正式開館し、同14年（1925）には國立京師圖書館、同17年（1928）には國立北平圖書館と名を改め、1949年の人民共和國成立後には北京圖書館と改稱、さらに1998年に現稱である中國國家圖書館に改稱したが（李致忠主編2009a, 2009b）、6種の洪武刊残本は設立当初からこの圖書館に存した。

『遼史』の版本については馮家昇（1933）が初めてまとめた記述を行なったので、本稿でも6種の洪武刊残本については馮（1933）に依據して北平圖書館時代を基準に考えていきたい。馮（1933）は6種のうちの4種を「甲種」から「丁種」の「元板明刻本」と呼び分け、その4種以外に北平圖書館にはさらに2種の重複本があると述べている。甲種から丁種までの順序は當時の北平圖書館の館藏目録での排列順序に基づくようで（「元板明刻本」という名稱も目録に據ったものという）、この順序は趙萬里撰集『國立北平圖書館善本書目』（民國22年（1933）刊）卷2史部・正史類での『遼史』明初刻本の排列順序とも合致する：⁵⁾

4) <http://read.nlc.cn/thematDataSearch/toGujiIndex> [最終アクセス2023年10月31日]

5) 本稿では原文引用の際、漢字の字體を改め、原文に無い約物を補う場合がある。細字は〈 〉で括って示し、原文の誤脱を補正する場合は〔 〕内に示し、その他の引用者註は【 】内に示す。

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻本〉【馮（1933）の「甲種元板明刻本」】

存八十八卷〈紀一至三十 志一至十七上 二十七至三十一 表一至八 傳一至二十八〉

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻本〉【「乙種元板明刻本」】

存五十四卷〈志一至十四 十八至三十一 傳一至二十六〉

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻本〉【「丙種元板明刻本」】

存九十五卷〈目錄 紀一至三十 志一至二十五 二十七至三十一 表一至八 傳一至二十七〉

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻本〉【「丁種元板明刻本」】

存八十卷〈紀一至六 二十四至三十 志一至十四 十八至三十一 表一至八 傳一至三十一〉

これら4種と残りの2種の扱いの違いは、当時の北平圖書館での書庫の違いを反映している。同館は善本蔵書の増加に対応するため、民國22年（1933）に善本乙庫を新設して清代文獻をここに移し、清代以前の善本を収める善本甲庫との別を設けるとともに、価値の劣る本を普通書庫に移し、また存巻が重複する同刊同印本は1,2部を残してその餘を善本重複書庫に移すという處置を施した（國立北平圖書館1934, 李致忠主編2009a: 78-79）。新たに編纂された『國立北平圖書館善本書目』は善本甲庫の蔵書を録したものであり、同書に著録されない2種は重複書庫に保管されていたものであった（國立北平圖書館1934）。本稿では、善本甲庫にあった4種を順に「（平圖）甲本」「乙本」「丙本」「丁本」と呼ぶとともに、それに續けて重複書庫にあった存5冊72巻本を「戊本」、存3冊33巻本を「己本」と呼ぶことにする⁶⁾。

2.2.2 戦後の所蔵状況

北平圖書館の善本は日中戦争の間、1935年に6萬餘冊が上海租界に南遷、1941年にはその中から選りすぐられた3萬餘冊が米國議會圖書館に寄託された（李致忠主編2009a: 125-128）。上海に留まった善本は翌年、日本占領下で「國立北京圖書館」と改

6) 馮家昇（1933）では後者を「三冊、三十五卷」とするが、「三十三卷」の誤植である。

稱されていた原在地に戻った (ibid.: 132–133)。一方、米國寄託の善本は1965年に臺灣の民國政府に返還され、臺北の國立中央圖書館（現國家圖書館）に典藏されることとなった。1985年には國立故宮博物院に移管されている。この結果、平圖甲本と丁本は臺北に、平圖乙本、丙本、戊本、己本は北京に分蔵されることとなった。

臺北藏本は『國立中央圖書館善本書目（增訂本）』（1967年刊）と『國立中央圖書館典藏國立北平圖書館善本書目』（1969年刊）に著録される。後者から引用する：

遼史 〈存八十卷 元脱脱等撰 元刊本 存卷一至四十七、卷五十八至卷九十八 八册 1002 465 (1—850)〉【平圖甲本】⁷⁾

遼史 〈存八十一卷 元脱脱等撰 元刊本 存紀卷一至卷七、卷二十四至卷三十、志卷一至卷十四、卷十八至卷三十一、表卷一至卷八、傳卷一至卷三十一 十三册〉【平圖丁本】

甲本の存卷数を、兩書目とも「八十卷」とするが、細目から分かるように「八十八卷」が正しい。丁本の存卷数が1巻増えたのは、後述のように補寫を加えて巻7を整理したためである。この兩本は尾崎康（1989: 578–579）の現地調査に基づく著録がある。

北京藏本は、まず『北京圖書館古籍善本書目』（1987年刊）に著録される：

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻本 九册 十行二十二字，黑口，左右雙邊〉【平圖丙本】 0801

存九十五卷〈一至五十五 五十八至九十七〉

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻本 七册〉【平圖戊本】 062

存七十二卷〈一至四十四 六十三至九十〉

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻本 八册〉【平圖乙本】 0799

存五十四卷〈三十一至四十四 四十九至六十二 七十一至九十六〉

7) 最後の数字は北平圖書館善本の米國疎開中の1943年に作成された『國會圖書館攝製北平圖書館善本書膠片』に關するもので、東洋文庫所編の番號(1002)とリール番號(465)、コマ數(1–850)を示す。

この書目には北京に所蔵されるはずの己本が著録されていないが、『國家圖書館古籍普查登記目録』（2015 年刊）では臺北に移った甲本と丁本を除く 4 本すべてが確認できる：

110000-0101-0019485 A00061 【平圖己本】

遼史一百十六卷（元）脱脱等撰 明初刻本 三册 存三十三卷（一至十一、二十五至三十六、六十九至七十八）

110000-0101-0019486 A00062 【平圖戊本】

遼史一百十六卷（元）脱脱等撰 明初刻本 七册 存四十二卷（一至十四、六十三至九十）

110000-0101-0020218 A00799 【平圖乙本】

遼史一百十六卷（元）脱脱等撰 明初刻本 八册 存五十四卷（三十一至四十四、四十九至六十二、七十一至九十六）

110000-0101-0020220 A00801 【平圖丙本】

遼史一百十六卷（元）脱脱等撰 明初刻本 九册 存九十五卷（一至五十五、五十八至九十七）

成本の記載は、存巻「一至四十四」の十位の「四」を脱した結果として存巻数も誤っており、巻数、細目ともに『北京圖書館古籍善本書目』が正しい。

以上、6 種の洪武刊残本の北平圖書館時代以降の著録状況を見たが、実際にマイクロフィルム画像で確認した、より詳細な存巻状況や印記について以下に整理しておく。

存 8 册 88 巻本（平圖甲本）

臺北國立故宮博物院書畫文獻處現藏（統一編號：平圖 006809-006816）⁸⁾。前掲の書目にあるとおり巻 1-47, 58-98 を存する。ただし、巻 60 第 4 葉と巻 70 第 30 葉は補寫葉である。首巻は「聖旨」の第 3 葉（版心部分を缺する）のみと「修史官員」の第 2 葉および「遼史目錄」全 21 葉を残す。倉石武四郎『舊京書影』（1929 年製）ではこの

8) 統一編號は國立故宮博物院の圖書文獻數位典藏資料庫 (<https://rbk-doc.npm.edu.tw/> [最終アクセス 2023 年 10 月 31 日]) に據る。

本の「聖旨」第3葉右半(271)と「修史官員」第2葉右半(272)および卷1(本紀第一)右半(273)が撮影されているが、汚損の形状を見るかぎり、この「聖旨」第3葉は、實は丁本の一部であったものが誤って綴じられたものである。また、「進遼史表」が卷63の前に置かれる。所藏印は、第1冊のみ「聖旨」第3葉と「修史官員」第2葉、卷1初葉およびその冊の末葉である卷11末葉に、以降は各冊の初葉と末葉に、「京師圖書 / 館收藏之印」朱文長方印が認められる。

存8冊55卷本(平圖乙本)

中國國家圖書館現藏(善本書號:A00799)。卷31-44, 49-62, 71-97を存す。各書目の存卷数の記載が卷96までの54巻となっているのは、卷97が初葉右半しか残存しないためか。ほかに卷36第13葉左半と第14葉、卷71第1-3葉、卷72第1-2葉を缺く。所藏印は各冊首尾に「京師圖書 / 館收藏之印」朱文長方印。改装の痕跡がある。

存9冊97卷本(平圖丙本)

中國國家圖書館現藏(善本書號:A00801)。卷1-56, 58-98を存す。各種書目が卷1-55, 58-97の95巻の殘本とするが、卷56の第1-2葉と卷98全4葉も殘存する。ただし、卷56の殘存葉は一部缺損があり、その前の卷55から紙葉の一部に破れがある。また、卷79第1葉を缺き、卷96-98も版心附近に缺損が目立つ。卷70第30葉は補寫。首巻は「修史官員」全2葉と「遼史目錄」全21葉を存す。「進遼史表」は卷63の前に置かれる。所藏印は、第6冊を除く各冊首尾と、第1冊に関しては卷1初葉にも、「京師圖書 / 館收藏之印」朱文長方印がある。

存13冊81卷本(平圖丁本)

臺北國立故宮博物院書畫文獻處現藏(統一編號:平圖002137-002149)。卷1-7, 24-44, 49-101を存する。卷7は第3葉右半までを存し、同葉左半以降末葉の第5葉まで補寫されている。卷39第2葉は誤って卷38第14, 15葉間に置かれる。首巻は「聖旨」第1葉上半のみ、「三史凡例」全1葉、「修史官員」全2葉、「遼史目錄」全21葉を存し、「聖旨」の第1葉缺損部と第2, 3葉は補寫されている。他にも紙葉の一部が缺損してい

るのを補寫した箇所が間々見られる。『舊京書影』にはこの本の「聖旨」第1葉左半(267)、「三史凡例」右半(268)、「修史官員」第1葉右半(269)、卷67(表第五)第5葉左半(270)が撮影されている。その寫眞では「聖旨」第1葉の殘葉は罫線を引いた用紙に貼付されているが、下半の缺損部は空欄であり、その部分の補寫が1930年代以降に行なわれたことを示している。藏書印は「京師圖書 / 館收藏之印」朱文長方印が各冊首尾に捺される(ただし第1冊初葉にはなく卷1初葉にある)のに加え、「晉府 / 書畫 / 之印」朱文方印が各冊初葉に、「敬德 / 堂圖 / 書印」朱文方印が各冊末葉に捺されている(ただし第10冊の首尾には印が見えない)。「敬德堂」は、明太祖朱元璋の第3子である初代晉王朱櫞(諡は恭王、在位1370-98)か、その長子朱濟熿(諡は定王、在位1398-1414)の堂號と考えられ(徐凱凱2015)、この2印の印主はそのどちらかであるから、この本は永樂年間(1403-24)前半以前に印刷された、洪武刊本中ごく初期の印本であることが判る。

存7冊72卷本(平圖戊本)

中國國家圖書館現藏(善本書號:A00062)。『北京圖書館古籍善本書目』の記載どおり卷1-44、63-90を存する。ただし、卷13第8、9葉と卷15第7葉、卷33第10葉、卷70第30葉、卷71第1-3葉、卷90第4葉を缺き、うち卷15と卷33は補寫葉が挿入され、卷70第30葉の箇所には同卷第20葉が本來の位置とは別に再度挿入されている。首巻には「遼史目錄」と「修史官員」のみをこの順で全葉存する。所藏印は、第1、4、6冊初葉と第7冊第3葉、第3、5、6冊末葉および卷1初葉に「京師圖書 / 館收藏之印」朱文長方印が確認できる。

存3冊33卷本(平圖己本)

中國國家圖書館現藏(善本書號:A00061)。『古籍普查登記目錄』の記載どおり卷1-11、25-36、69-78を存する。首巻は「遼史目錄」第11-21葉のみが残る。卷70第30葉は補寫。各冊初葉および卷1初葉、第1、2冊末葉に「京師圖書 / 館收藏之印」朱文長方印が見えるが、マイクロフィルム上では第3冊末葉に同印が確認できない。

2.2.3 京師圖書館時代の所蔵状況

上で見た舊国立北平圖書館所蔵の6種の洪武刊殘本は、その所蔵印からも判るように同館の前身である京師圖書館から引き継がれた藏書であるが、その当時の6種の殘本の構成は、北平圖書館時代以降とは實は食い違う部分が存在する。

「學部圖書館」とも呼ばれる清代の京師圖書館を含む京師圖書館の時代には、公刊、未刊の善本藏書目録が數次にわたって編纂された。清學部時代の圖書館監督（館長）繆荃孫（1844-1919）が編んだ『清學部圖書館善本書目』（民國元年（1912）『古學彙刊』所收本のほか、自筆稿本あり）を嚆矢として、民國時代の初代館長江瀚（1853-1935）の下で編まれた『京師圖書館善本簡明書目』（民國2年（1913）『教育部編纂處月刊』所收本のほか、自筆稿本あり）、第2代館長夏曾佑（1863-1924）が編んだ『京師圖書館善本簡明書目』（民國5年（1916）刊）などが知られる（林振岳 2015, 2022: 125-206, 2023）。實質的な著録内容は大同小異なので、ここでは最も記述が正確と思われる夏曾佑『善本簡明書目』史部・正史類に據って『遼史』洪武刊殘本の著録内容を確認する（各本の行頭の括弧付き數字は引用者による）：

(1) 『遼史』一百十六卷〈清内閣書〉

元托克托等撰，元刊初印本，有修史官員姓名

存紀〈三十卷全〉志〈一之十七上 二十七之三十一〉表〈八卷全〉傳〈一之二十八重一之二十〉 九册

〈按：『繆目』無志二十七之三十一及重本。『江目』無志三十〔一〕。〉

(2) 又一部〈清内閣書〉

晉府本，蜨裝

存紀〈二十四之三十〉志〈一之十四 十八之三十一〉表〈一之八全〉傳〈一之三十一〉 十二册

(3) 又一部〈清内閣書〉

元刊本⁹⁾

9) 繆荃孫『清學部圖書館善本書目』史部上・正史類および江瀚館長時代の『京師圖書館善本簡明書目』史部上・正史類では、この本にも「蜨裝」との註記がある。

存志〈一之十四 十八之三十一〉傳〈一之二十六〉 八冊

〈按：『繆目』作傳一之三十一。『江目』同。〉

(4)又一部〈清內閣書〉

元刊本

存紀〈一之三十全〉志〈一之十七上 二十七之三十一〉表〈一之八〉傳〈一之二十八〉 八冊

〈按：『繆目』作傳一之二十，少二十一之二十八。『江目』同。〉

(5)又一部〈清內閣書〉

元刊本

存紀〈一之三十〉志〈一之十四〉表〈八卷〉 四冊

(6)又一部〈清內閣書〉

元刊本

存紀〈一之十一 二十五之三十〉志〈一之六〉表〈七之八〉傳〈一之八〉 三冊

この書目にも6本の『遼史』「元刊本」が著録されているが、まず注目されるのは6本ともに「清内閣書」と註記されていることであろう。これは、そのいずれもが清廷の内閣大庫の舊蔵書であったことを示している。

次に、この6本と北平圖書館時代の6本との對應關係は、「本館新舊善本書目異同表」(國立北平圖書館 1934)によって知ることができる。これは、夏曾佑『京師圖書館善本簡明書目』(舊目)と趙萬里『國立北平圖書館善本書目』(新目、新刻書目)との異同を示したものだが、それに據れば、(1)は平圖甲本8冊に當たる。京師圖書館時代には列傳1-20(卷71-90)の1冊が重複していたが、この重複冊は北平圖書館時代に重複書庫へ移されたと「異同表」には記される。これは現在、(5)に當たる戊本のうちの1冊とされているものだが、これは、たまたま列傳が缺けていた(5)に補配したというよりも、そもそもこの1冊は本來戊本の一部だったのを、正しく原狀回復したにすぎないように思われる。

次に、「晉府本」とある(2)は無論、平圖丁本13冊に對應するが、この時代には紀1-7(卷1-7)の1冊が無かった。この冊數の増加は、民國10年(1921)に歴史博物

館が保管する内閣大庫檔案中に紛れ込んでいた内閣大庫舊藏殘本が京師圖書館に移管、整理され、泣き別れになっていた多くの巻冊が、先に京師圖書館に入藏していた内閣大庫舊藏殘本との再會を果たしたとと關聯づけられる（林振岳 2022: 187-189）。巻1-7の分冊中にも晉府舊藏を示す藏印があることは、両者が本來同一の本を構成していたことの明證である。なお、『善本簡明書目』はこの本が「蜨裝」（蝶裝）であったことを記録しているが、これは丁本の印本としての古さを示している。ただし、この蝶裝は京師圖書館時代に行なわれた修理によって改裝されてしまい（林振岳 2022: 233-244）、1929年に撮影された『舊京書影』に寫る丁本（270）はもはや包背裝に改裝されている。

(3)はそのまま平圖乙本8冊に對應する。この本は、夏曾佑『善本簡明書目』では記載がないものの、繆荃孫『善本書目』や江瀚『善本簡明書目』では「蜨裝」と註記されており、(2)とともに(3)が早期の印本であったことが示唆される。ただし、こちらも現在では包背裝に改裝されている。

(4)は平圖丙本9冊に對應する。北平圖書館時代には巻48-56（志17下-25）の1冊が増加しているが、丁本と同じ理由であろう。

(5)、(6)は北平圖書館時代には重複書庫に保管されていたため、『北平圖書館善本書目』には記載されないが、(5)は現在の戊本7冊に對應し、(6)はそのまま己本3冊に對應する。(5)は(1)の1冊（巻71-90）を加えれば計72巻となり現在の戊本と同巻数となるが、冊数は5冊にしかならない。これは、現在の戊本の分冊方式が京師圖書館時代とは異なるためと考えざるをえない。收藏印が各冊の首尾に捺されたとすると、現在の第1-3冊が曾ては1冊で、第4、5冊も1冊であったことになるが、それでは(1)の1冊を除いて3冊になり、数が合わない。(5)の分冊方式は不明とせざるをえない。

2.2.4 清内閣大庫時代の所藏狀況

上述のように、舊北平圖書館所藏の6種の『遼史』殘刊本はいずれも清内閣大庫の藏書に遡る。内閣大庫の藏書は、清末に京師圖書館（學部圖書館）が創設される際に移送され、圖書館の善本藏書の中核を成したものであった。その頃に内閣大庫藏書の整理に當たった内閣侍讀の劉啓瑞（1878-1960）は『内閣庫存書目』と總稱される一連

の蔵書目録を作成した（林振岳 2022: 91-107）。その『庫存書目』のうちの『内閣庫存殘書目』史類・正史類には、次のように5種の『遼史』洪武刊本が著録されている（括弧付き数字は引用者による。ここでは排列の都合で直前の明鈔存 19 冊本も引用する）：

『遼史』 缺本紀卷九至十四	明寫本 存十九本
(1)又 存卷一至四十七 五十八至九十七	十行本 存八本
(2)又 存卷一至四十七 六十九至七十八	同上 存六本
(3)又 存卷一至十一 二十五至三十六 五十八至九十七	同上 存五本
(4)又 存卷一至四十四 六十三至七十	同上 存四本
(5)又 存紀二十四至三十 表一至八 傳一至三十一 志十至十四 十八至三十一	同上 存二十本

このうち、(5)は明らかに平圖丁本で、表、傳、志の順序が乱れているが、京師圖書館時代の状態と完全に一致するから、「存二十本」は「存十二本」の誤りである。(4)は戊本で、これも京師圖書館時代の状態に合致する。問題は(1)~(3)だが、分冊方式から見て、これらはそれぞれ甲本、丙本、己本のいずれかに該当する¹⁰⁾。乙本は書き漏らしたと考えてよい。實のところ、甲、丙、己三本は分冊方式が全く同じであり（本稿末尾の附表を参照）、どの冊を存するかの違いしか（少なくとも巻数の上では）ない。言い換えれば、いずれかの本の不足する冊を、他の本から移し替えることで、より完本に近い本（と、より不全の本）を自由に創出することができる。内閣大庫時代と京師圖書館時代の所蔵状況を比べると、後者においてそのような冊の移動が行なわれたことが判明する。すなわち、(1)~(3)の中で最も冊数が少ない5冊本の(3)は恐らく平圖己本3冊に相当し、京師圖書館時代にその第3冊（巻58-68）と第5冊（巻79-97（98））を6冊本の(2)に移したものであろう¹¹⁾。そうして8冊本となった(2)の存巻状態は(1)と全く同じになるので、京師圖書館時代に重複巻を除いて全く同じ構成であった甲本（『京師

10) (1)と(3)に「五十八至九十七」とあるのは実際には「五十八至九十八」とあるべきである。

11) あるいは、(3)の第3-5冊（巻58-97（98））と(2)の第6冊（巻69-78）を入れ替えたという可能性もある。

『圖書館善本簡明書目』の(1)と丙本(同書目の(4))の、どちらが上記の(1)でどちらが(2)なのかは判断がつかない。いずれにせよ、京師圖書館時代に異なる本の間で冊を組み替えてより完全な本を創ろうとする試みがあり、現在の舊北平圖書館藏本の一部がその影響を受けていることは確かである。しかし、後で明らかにするように、甲、丙、己三本の間で冊の入れ替えを行なうことは、印本の年代を特定する上で支障が生じるような問題ではない。

2.3 北京圖書館への寄贈本

新中國成立後、國立北平圖書館改め北京圖書館には中國各地の多くの藏書家からの寄贈があったが(李致忠主編 2009a: 167)、そうした寄贈書の中に3件の洪武刊本『遼史』が含まれていた。『北京圖書館善本書目』(1959年刊)は1937年以降、特に建國後10年の間に新たに入藏した古籍善本のみを収めた藏書目録であるが、卷2史部上・紀傳類にはその3本が次のように著録されている：

『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻遞修本 二十四册 翁捐〉	3821
『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻遞修本 八册〉	3390
『遼史』一百十六卷〈元脱脱等撰 明初刻遞修本〔卷四十七配清抄本〕 二十四册〉	7367

この記述は『北京圖書館古籍善本書目』(1987年刊)にもほぼそのまま踏襲されている¹²⁾。また、國家圖書館への改名後に編まれた『國家圖書館古籍普查登記目録』(2015年刊)でもその内容は基本的に繼承されている(第1冊の該當各所からの抜粹)：

110000-0101-0003586 03821 遼史一百十六卷 (元)脱脱等撰 明初刻遞修本 二十四册
110000-0101-0003156 03390 遼史一百十六卷 (元)脱脱等撰 明初刻遞修本

12) 書號 3821 の本からは「翁捐」の記載が消え、「十行二十二字黑口左右雙邊」の説明が加わっている。

八冊

110000-0101-0007051 07367 遼史一百十六卷 (元) 脱脱等撰 明初刻遞修本
二十四冊

民國期に北平圖書館が藏していた洪武刊本がすべて残本、不全本であったのに對し、人民共和國成立後に入藏したこれら3本はすべてが(ほぼ)完本であった。以下にこの3本(表1の#8-10)について梗概を記す。

2.3.1 常熟翁氏舊藏本(翁本)

『北京圖書館善本書目』に「翁捐」との記載のある本は、江蘇常熟的の藏書家として知られる翁心存(諡は文端, 1791-1862)やその子翁同書(諡は文勤, 1810-65)、同龢(諡は文恭, 1830-1904)兄弟、同書の孫翁斌孫(1860-1923)ら翁氏累代の藏書を斌孫の子翁之熹(1896-1972)が1950年から翌々年にかけて北京圖書館に寄贈したものである(曹培根 2019: 196-202)¹³⁾。上に見た『遼史』(善本書號 3821)はその翁氏寄贈書のうちの一本で、翁之熹撰『常熟翁氏藏書記』(1948年編撰)卷2元本には次のように著録されている:

『遼史』〈二十四冊〉

元脱脱撰。

藏印: 項氏萬卷堂圖籍印、項印篤壽、威如氏藏書印、硯耘館書畫印、少谿主人、浙右項篤壽子長臧書。

『藏書記』手寫本では讓渡年月日と有償、無償の別を示すための圈點がそれぞれの書名

13) 1950年「8月26日 文化部文物局第1914號通知, 翁之熹捐贈善本圖書219種1699冊, 又6種12冊撥交北京圖書館收藏。」(李致忠主編 2009b: 43); 同年「11月11日 翁之熹捐贈圖書82種122冊」(ibid.); 1951年「10月24日 翁之熹捐贈書籍12種91冊。」(ibid.: 45); 1952年「12月 翁之熹捐贈書籍647種1827冊。」(ibid.: 46); 1953年「4月20日 文化部社管局第420號通知, 撥交趙元方、邢之襄、劉少山、潘世滋、翁之熹、瞿鳳起等捐贈善本圖書計886種6440冊, 由北京圖書館典藏。」(ibid.: 47)

上部に付されているというが、それに據れば、この『遼史』は1950年8月9日に北京圖書館に寄贈されたものである。

この本は116巻24冊を完存するが、巻48第12葉と巻63第5葉、巻70第30、31葉、巻89第4葉は補寫葉である。首巻は「進遼史表」「修史官員」「聖旨」「三史凡例」「遼史目錄」をこの順で全葉備える。第1、4、7、13、15、19冊の初葉に「項氏萬卷 / 堂圖籍印」朱文長方印および「項印 / 篤壽」白文方印が、第3、6、12、14、18、24冊の末葉に「浙右項 / 篤壽子 / 長藏書」朱文方印および「少谿 / 主人」朱文方印があり、明代後半の書畫鑑藏家として名高い項元汴（字は子京，號は墨林，1525-90）の兄で、藏書家として知られた項篤壽（字は子長，號は少谿，浙江秀水人，1521-86；藏書室名は萬卷樓、萬卷堂）の舊藏書であることが判る。藏書印としては他に、第1、7、13、19冊の初葉に「威如 / 氏藏 / 書印」白文方印、第6、12、18、24冊の末葉にその「威如氏藏書印」と「硯耘館 / 書畫印」朱文長方印が、また第1冊初葉と第24冊末葉に「北京 / 圖書 / 館藏」朱文方印が捺されている。この「威如氏藏書印」「硯耘館書畫印」の印主は明らかにできないが、前者は湖南圖書館藏南宋衢州刊元明遞修本『古史』（北宋紹聖2年（1095）蘇轍撰）自叙初葉にも確認される（『湖南圖書館古籍線裝書目錄』史部分卷口繪，579頁）¹⁴⁾。この本は湖南長沙の葉啓勳（1900-72）、啓發（1905-52）兄弟の舊藏書であるが、彼らの題識（葉啓勳撰『拾經樓袖書錄』卷上所收1928年8月15日題識および葉啓發撰『華鄂堂讀書小識』卷2所收1929年5月5日題識）に據れば、同本は湖南道州の何紹基（1799-1873）の舊藏書で、その曾孫何詒愷が1926、27年頃に書賈に賣りに出したのを葉兄弟が入手したものという。「威如氏藏書印」は何紹基以前の收藏者の藏印にちがいない。また、北京泰和嘉成拍賣有限公司の2010年秋季藝術品拍賣會に出品され、落札された清乾隆刊本『文房肆攷圖說』（乾隆43年（1778）唐秉鈞自序；Lot 1208「文房肆考八卷」として出品）は、同社のwebサイト（<http://www.thjc.cn/>）の「拍賣結果」の記載に據れば、「威如氏藏書印」「硯??館藏書畫」の鈐印が揃って確認できるらしい¹⁵⁾。

14) この本は第四批國家珍貴古籍名錄に「宋刻元明遞修本」として選定されている（名錄編號09941）。

15) この鈐印の情報はかつては記載されていたが（2021年11月アクセス）、2023年10月現在では見ることができない。「硯??館藏書畫」の「??」は「耘」にちがいないが、この「硯耘館藏書畫」が「硯耘館書畫印」の誤録か、別の印かは定かでない。

これらのことから、この2印の印主は18世紀末から19世紀半ばまでの間に活動した人物であることまでは特定できる。以上をまとめると、この『遼史』刊本は明人項篤壽と清人某の手を経て常熟翁氏の所蔵となり、北京圖書館（現國家圖書館）の許に歸したものである。

2.3.2 常熟瞿氏舊藏本（瞿本）

上引のとおり、『北京圖書館善本書目』は8冊本『遼史』（善本書號3390）についてその前所藏者に關する記載を缺くが、版本を見れば卷1初葉および卷8初葉に「鐵琴銅 / 劍樓」白文長方印が認められるように¹⁶⁾、この本は清末四大藏書家の一つで、山東聊城の楊氏海源閣と共に「南瞿北楊」と並び稱された、瞿紹基（號は蔭棠，1772–1836）、鏞（字は子雍，1794–1846）父子に始まる江蘇常熟的瞿氏鐵琴銅劍樓の舊藏書である¹⁷⁾。瞿鏞の孫孫啓甲（字は良士，1873–1940）が光緒24年（1898）に刊刻した瞿鏞撰『鐵琴銅劍樓藏書目錄』卷8史部一・正史類はこの本を以下のように著録する：¹⁸⁾

『遼史』一百十六卷〈元刊本〉

題名與『宋史』同。前有至正三年修史詔旨及三史凡例、史官銜名、進書表。此元刻十行本，行廿二字。明監本脫譌甚多，不逮是本也。

また、啓甲が商務印書館の張元濟の協力を得て出版した『鐵琴銅劍樓宋金元本書影』（1922年刊）元本史部にはこの本の卷8初葉の書影が収録されているが¹⁹⁾、所藏印の位置や紙の破れ、墨のかすれの一致から、この本が確かに現國家圖書館藏本（書號03390）と同一物だと判断できる。瞿氏は新中國成立後、啓甲の子息である瞿熾邦（字は濟蒼）、耀邦（字は旭初）、熙邦（字は鳳起）兄弟が累代の藏書を數次にわたって北

16) 藏書印としては他に首卷の聖旨初葉と116卷末葉に「北京 / 圖書 / 館藏」朱文方印がある。

17) 瞿氏鐵琴銅劍樓については藍文欽（1991）、仲偉行等（1997）、曹培根（2008）を參照。

18) 江標輯『鐵琴銅劍樓藏宋元本書目』史部の「『遼史』一百十六卷〈元刊本〉」の記述もこれを簡略化したもので、新たな情報は無い。同書と『鐵琴銅劍樓藏書目錄』との關係については藍文欽（1991: 189–191）を參照。

19) 丁祖蔭による識語には「『遼史』一百十六卷〈元刊本〉 / 前有至正三年修史詔旨及三史凡例、史官銜名、至正四年進書表。至正間浙江行省杭州路刊本也。」とある。

京圖書館に寄贈しているが(仲偉行等 1997: 78-79, 曹培根 2008: 141-142)²⁰⁾, この『遼史』もこのときに北京圖書館に入藏したものとみられる。『北京圖書館善本書目』には「瞿捐」と記載して瞿氏寄贈本であることを明示するものもあるが²¹⁾, この『遼史』のように「鐵琴銅劍樓」印をもちながら「瞿捐」と記載されないものもかなりの数存在する。

この本は全ての洪武刊本が缺く卷70第30葉を除いて8冊116卷の全葉を保存するが、紙面の汚損が目立つ紙葉が多い。首卷は「聖旨」(末葉は補寫葉)、「三史凡例」(補寫葉)、「修史官員」、「進遼史表」(末葉は補寫葉)、「遼史目錄」をこの順で排することは『鐵琴銅劍樓藏書目錄』等が記すとおりである。藏書印は上記のとおり「鐵琴銅劍樓」印と「北京圖書館藏」印が認められるのみで、常熟瞿氏以前の所藏者は明らかでない。

2.3.3 上海涵芬樓舊藏本(張本)

『北京圖書館善本書目』に卷47配清抄本と註される24冊本『遼史』(善本書號7367)は首卷の遼史目錄初葉に「海鹽 / 張元濟 / 經收」朱文方印と「涵芬樓」朱文長方印が、卷116末葉に「涵芬 / 樓藏」白文方印が捺されていることから、上海商務印書館(1897年創業)の藏書樓で、附設圖書館である東方圖書館の建設(1924年)に伴ってその善本室となった涵芬樓の藏書であったことが判る。商務印書館本社や東方圖書館は1932年の上海事變(一・二八事變)の際に日本軍の爆撃に遭って焼壊し、極東第一と稱された東方圖書館の48萬冊以上の藏書は、上海金城銀行の地下金庫に移されていた選りすぐりの5千餘冊の善本を除き灰燼に歸した(商務印書館善後辦事處1932)。商務印書館の董事長であった張元濟(字は筱齋, 號は菊生, 浙江海鹽人, 1867-1959; 藏書室

20) 1950年「1月4日 文化部文物局第343號通知, 將收購鐵琴銅劍樓瞿氏捐書13箱(宋、元、明善本圖書52種1776冊)……, 撥交本館收藏。」(李致忠主編2009b: 41); 1951年「3月江蘇“鐵琴銅劍樓”瞿氏捐贈善本圖書20種。」(ibid.: 44); 1951年「8月23日 文化部文物局第1779號通知, 撥交江蘇瞿氏捐贈鐵琴1張、鐵琴銅劍樓匾額1方、善本書20種及收購善本書190種。」(ibid.: 45); 1953年「4月20日 文化部社管局第420號通知, 撥交趙元方、邢之襄、劉少山、潘世滋、翁之熹、瞿鳳起等捐贈善本圖書計886種6440冊, 由北京圖書館典藏。」(ibid.: 47); 1954年「1月14日 文化部社管局第3959號通知, 撥交……及收購瞿氏善本圖書120種, 由北京圖書館典藏。」(ibid.: 48); 同年「2月16日 瞿鳳起、瞿濟蒼、瞿旭初等捐贈善本圖書99種600冊。」(ibid.: 49)

21) 仲偉行等(1997: 86-99)の統計によると、「瞿捐」の記載があるものは計242種ある。

名は涉園)は、銀行庫中であって難を免れたそれらの善本について1937年までに解題を書き上げ(沈津2018:25-30)、晩年になって『涵芬樓燼餘書錄』(1951年刊)として出版したが、その史部に著録される『遼史』元刊本はこの本である:

『遼史』一百十六卷 元刊本 二十四册

卷首進遼史表。次修史官員。次日録。目後有校勘臣彭衡、岳信、楊鑄、牟思善、卜勝、揭模六人凡二行。書名小題在上。大題在下。次行題開府儀同三司上柱國録軍國重事中書右丞相監修國史領經筵事都總裁臣脫脫奉敕修。半葉十行。行二十二字。板心下記刻工姓名。是爲元代官板。然鑄刻頗爲粗率。校勘亦疏。時見譌字。惟以校明南北監及武英殿諸刻。則此猶爲最勝之本。如紀第四。會同九年。杜重威遣貝州節度使梁漢璋率衆來拒。諸本竟改貝州二字爲其將。又志第十六百官志二。五國部後。有以上十九節度使爲小部族一行。明南監本有行無字。北監及武英殿本竝空行無之。又第三十一刑法志下。伶人張隋本宋所遣洵者句。諸本均改洵爲的。義不可通。其他擅改之字。指不勝屈。書之有貴於初刻。蓋爲是也。

解放後の1953年、東方圖書館の全蔵書は新政府に寄贈され、『燼餘書錄』所載の善本も北京圖書館へ收藏されることとなった(商務印書館1997、沈津2018:49-51)²²⁾。

この本には、上記以外の蔵書印として、首卷「進遼史表」初葉と卷116末葉に捺される「北京 / 圖書 / 館藏」朱文方印に加え、卷12初葉に「晉 / 易」(晉陽)白文方印があるものの、印主は不明である。その一方で、所蔵印は確認できないが、後に示す資料から、この涵芬樓蔵本が蔣汝藻の舊蔵書であることが判明する。民國期の蔵書家として知られる實業家蔣汝藻(字は元采、號は孟蘋、浙江烏程人、1877-1954;蔵書室名は傳書堂、密韻樓)は、1925年に事業經營の失敗から浙江興業銀行に抵當に入れた蔵書を請け戻すことができず、翌年その蔵書のうちの多くの善本が商務印書館に買い取られて涵芬樓の蔵に歸することとなった(張元濟『涵芬樓燼餘書錄』序)。1951年に刊行された『燼餘書錄』の記述からは涵芬樓蔵本の前所蔵者について知りえないが、

22) 1954年「8月31日 文化部社管局撥交涵芬樓燼餘書籍269册、東方圖書館留存圖書160種8672册。」(李致忠主編2009b:49)

顧廷龍（1904-98）による批注本『燼餘書錄』には、商務印書館の胡文楷（1901-88）の調査記録に基づいて蔣氏舊藏本に對して總目の書名上部に「蔣」字を付した書き入れがあり（高橋智 2010）、これによって涵芬樓藏書中の蔣氏舊藏本を窺い知ることができる。しかし、この記録は蔣氏舊藏本を網羅的に示したものとは考えがたい。例えば、『燼餘書錄』では「『遼史』一百十六卷 元刊本 二十四冊」に續いて「『金史』一百三十五卷 元刊本 四十八冊」と「『元史』二百十卷 明洪武刊本 四十一冊」が著録されるが²³⁾、これらはいずれも「蔣」字の標示をもたない。ところが、蔣汝藻の藏書目録である『傳書堂書目』（鄭振鐸舊藏、中國國家圖書館現藏鈔本）卷2 史部・正史類には「『遼史』一百十六卷〈元刊 十行廿二字〉二十四冊」「『金史』一百三十五卷〈元刊 【十行廿二字】〉四十八冊」「『元史』二百十卷〈明刊【洪武】〉四十一冊」が見える²⁴⁾。一般に、同版本でも（特に大部の書籍であれば）しばしば分冊数が異なることがあるので、このように複数の版本の冊数が一致するのは偶然とは考えにくい。ゆえに、これらの本は蔣氏の藏書に由來するとみるべきである。蔣氏の藏書目録としては、蔣汝藻の求めに應じて浙江海寧の王國維（1877-1927）が撰じた『傳書堂藏善本書志』が知られるが、同書はこの『遼史』について次のように著録している：²⁵⁾

『遼史』一百十六卷〈元刊元印本〉

開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、中〔書〕右丞相、監修國史、領經筵事、都總裁臣脫脫奉敕修。

脫脫等進遼史表〈至正四年〉、修史官員銜名。

每半葉十行，行廿二字。目錄後有校勘臣彭衡、岳信、楊鑄、牟思善、卜勝、揭模姓名二行。

23) 『金史』一百三十五卷元刊本と『元史』二百十卷明洪武刊本の間には『金史』殘四卷元刊本（晉府舊藏）が著録されているが、これは除外する。

24) 【 】内は後からの書き入れ。『金史』と『元史』の間には『金史詳校』が著録されるが、これは除外する。なお、同じく鄭振鐸舊藏で中國國家圖書館が現藏する鈔本『傳書堂善本書目』には冊数の記載が無い。

25) この記述は1974年に臺灣藝文印書館が影印出版した定稿本に據る。王國維の手元にあった稿本『傳書堂藏書志』（中國國家圖書館現藏）は『遼史』の記載を脱する。

首巻の目録前に「進遼史表」と「修史官員」のみが存する点と『燼餘書録』の記載と一致しており、蔣氏傳書堂藏本と涵芬樓藏本とが同一であることの證左となる。

この本は『北京圖書館善本書目』が記すとおり巻47が全葉存せず補寫葉が配されているほか、巻34第5葉（末葉）と巻35初葉、巻44第29葉、巻102第2葉、巻116第25葉（末葉）も補寫葉である。巻36第12葉と巻70第30葉も缺するが補寫はされていない。また、首巻は『涵芬樓燼餘書録』や『傳書堂藏善本書志』が記すとおり「進遼史表」「修史官員」「遼史目録」のみを附すが、「進遼史表」「修史官員」ともに全葉補寫葉であり、「遼史目録」も第1, 2葉が補寫葉である。全巻にわたって朱句點が付されており、巻13第5葉には記事に對して2箇所の書き込みがある。

2.4 その他の諸本

以下では、舊北平圖書館藏本および北京圖書館藏本を除くその他の洪武刊本『遼史』（表1の#11-16）について、各種書目類の記載や書影に基づき概要を述べる。

2.4.1 上海圖書館藏本（上圖本）

『中國古籍善本書目』史部（1991年刊）巻5紀傳類・斷代によれば、上海圖書館に『遼史』明初刻本の完本が所藏される。この本については、1987, 91, 95年に上海圖書館で版本調査を実施した尾崎康（1996: 44）が詳しく著録している：

遼史 116 卷 元脫脫等奉敕撰〔明初〕覆元至正5年江浙等處行中書省刊本（巻71～75補寫） 32冊

後補香色表紙（28×19.4センチ）襷裝。

首に「聖旨」に始る3葉、三史凡例、進遼史表、修史官員、遼史目録がある。

本文巻首「本紀第一〈（隔6格）〉遼史一／〈（低1格）〉開府儀同三司上柱國録軍國重事中書右丞相監修國史領經筵事都總裁臣脫脫奉／敕修」。

左右雙邊（21×15センチ）。10行、22字。版心 小黑口、雙黑魚尾、題「遼紀（志・傳）幾」，下象鼻に刻工名。刻工名は多いから略すが、前掲の南史、北史の明初覆元大德九路儒學刊本のものなどと共通し、同じく覆刻本であろうと考えられる。

ただし、原刊本はまったく現存しない。

末巻は國語解で、尾題は「國語解第四十六」。

ところどころに朱句點がある。巻71～七十五は補寫。

藏印は「濮陽李廷相雙^マ／檜室書畫私印^マ」（1481～1544）、「武林高氏瑞^マ／南莊書畫記^マ」（高濂・萬曆初年まで在世）、「豫園／主人」〈(陰)〉（潘允端・1526～1601）、「何焯／私印」（1661～1722）、「黃^マ／丕烈」〈(陰)〉「堯^マ／翁」（1763～1852）、「汪印／士鐘」^マ、「顧印／黃斤^マ」〈(陰)〉、「□□／清暇」印がある。

この本は2008年に公布された「第一批國家珍貴古籍名錄」に選定されており、『第一批國家珍貴古籍名錄圖錄』（同年刊）には「01479 遼史一百十六卷（元）脫脫等撰明初刻本 / 匡高 20.9 厘米，廣 14.7 厘米。半葉十行，行二十二字，黑口，左右雙邊。有“武林高氏瑞南藏書畫記”、“豫園主人”等印。上海圖書館藏。」として巻1初葉右半の書影が載せられている。その葉には解説のとおり、右下に「豫園 / 主人」白文方印、その上に「武林高氏瑞 / 南藏書畫記」朱文長方印の藏印が見える。この本は1957年に出版された『上海圖書館善本書目』には著録されておらず、同書編纂時點ではまだ公藏されていなかったものとみられる。

藏書印から知られるかぎり、明代中期の藏書家李廷相（字は夢弼，號は蒲汀，諡は文敏，河南濮陽人，1481-1544；藏書室名は雙檜堂）以後、明代後期の鑑藏家で上海豫園の造營で知られる潘允端（字は仲履，號は充庵，上海人，1526-1601）、同時期の戲曲家高濂（字は深甫，號は瑞南，浙江錢塘人，ca.1532-ca.1606²⁶⁾），さらに清代前期の校勘家何焯（字は紀瞻，號は義門，江蘇長洲人，1661-1722），そして清朝隨一の藏書家、目錄學家である黃丕烈（字は紹武，號は堯圃、復翁，江蘇長洲人，1763-1825；藏書室名は百宋一廬、士禮居）とその許で校勘に当たった顧廣圻（字は千里，號は澗蘋，江蘇元和人，1766-1835；藏書室名は思適齋），彼らと交友があり黃氏歿後その舊藏書の蒐集に熱心だった汪士鐘（字は春霆，號は閩源，江蘇長洲人，道光年間（1821-50）まで在世；藏書室名は藝芸書舍）と幾多の藏書家の手を経てきたことが判る。來歴の判

26) 高濂は萬曆19年（1591）自序の著作『遵生八箋』があるほか、同31年（1603）までの生存が確認できる（朱璟2017）。

る範囲で平圖丁本に次いで古い版本である點は特筆される。

これらの所蔵者のうち、李廷相は藏書目録『濮陽蒲汀李先生家藏目録』を遺しているが、その中には「『遼史』」（中間朝西・頭櫃二層）、「『遼史』十二本」（同・三櫃四層）、「『遼史』十二本」（中間朝東・三櫃四層）、「『遼史』七本」（東間朝東・頭櫃一層不全舊書）、「『遼史』十二本」（西間朝西・三櫃二層）と『遼史』が5種記載される。この目録では刊刻年代がほとんど記されないため、これらの『遼史』が洪武刊本なのか、嘉靖7年（1528）に新刻された南監本なのか決定できないが、冊数の記載が缺けている第一の本は、同櫃同層に宋刻『史記』等の善本が含まれることをふまえると、上海圖書館現蔵の洪武刊32冊本に当たる可能性がある。一方、汪士鐘の藏書目録である『藝芸書舍宋元本書目』元板書目には『遼史』は見えない。中國國家圖書館藏清鈔本『藝芸書舍書目』には宋元版に限らない汪士鐘藏書が列挙されているが、そこにも『遼史』は含まれていない。

2.4.2 天理大學附屬天理圖書館藏本（天理本）

この本は『天理圖書館稀書目録：和漢書之部 第四』（1998年刊）歴史—中國史に詳しく著録される：

遼史 百十六卷存百十五卷 脱脱（元）等奉敕撰

〔明初期〕刊 二十三冊

393

卷頭「本紀第一（～〔國語解第四十六〕）遼史一（～〔百十六〕）／〔官名等三十一字省略〕脱脱奉／敕修」目首「遼史目録」

袋綴（包背裝）改裝後補紺色表紙 27.9 糶 18.8 糶 四周雙邊 20.7 糶 15 糶 有界十行二十二字小雙行 版心小黑口雙魚尾「遼紀一（～遼解四十六）（丁付）（刻工名）」百十六卷存百十五卷（卷百缺，卷百一至百十三は補寫）二十三冊〈1〉聖旨（至正三）三丁 三史凡例一丁 修史官員銜名二丁存一丁（第一丁缺）目録二十一丁 卷一（本紀一）十丁 卷二（本紀〔二〕）八丁 【以下、各冊の卷丁が記載されるが卷百十五まで略。その間の特記事項：第15冊の首，卷六十三（表一）の前に「進遼史表三丁」あり；第17冊「卷七十（表八）三十三

丁存三十二丁（第三十丁缺，補寫）；卷百缺，第22冊（卷百一（列傳三十一）～卷百十三（列傳四十三））は全丁補寫。】 卷百十六（國語解四十六）二十五丁存二十二丁（第二十三至二十五丁缺）

明版 覆元至正五年江浙等處行中書省刊本 卷百を缺く 修史官員銜名第一丁，卷百十六第二十三至二十五丁を缺く 卷百一至百十三（卷百四第二丁は柱書「遼傳三十六 二」と誤記し，卷百六第一丁の後に錯簡），卷七十第三十丁は補寫 第二十二冊に卷百十四・百十五の補寫葉を合綴 聖旨第三丁は三史凡例の後に錯簡 刻工名一【略】 卷七十一以下，破損部分に裏打を施し，補寫間々あり 入紙あり 印記「雙鑑樓」「雙鑑樓藏書印」「紅安傅沅叔攷藏善本」「藏園」「傳增湘印〔陰刻〕」「傳增湘讀書」「沅叔」「岳齋」「慶〔陰刻〕」「慶」（二種）「田慶」「田慶印信〔陰刻〕」「子祥」

222.04 - イ 3

第21冊が卷99までで，第23冊が卷114から始まるのに對して，第22冊が卷101から卷115までを含むために，卷100が足りず，卷114と卷115が重複する結果となっているが，ここから察せられるように，この第22冊は原版の不足を補うために補寫されたのではなく，分冊構成の異なる他の『遼史』寫本の1冊を補配したものであろう。それは卷116 國語解の無い系統の『遼史』版本の最終冊であったと思われる。

印記から知られるように，この本は民國期の大藏書家傅增湘（字は沅叔，號は藏園，四川江安人，1872-1949；藏書室名は雙鑑樓）がかつて藏し，1930年に他の善本とともに賣りに出したのを，東京文求堂書店主人田中慶太郎（字は子祥，號は救堂，京都人，1880-1951）が購入して日本に將來したものである。その経緯については蘇枕書（2018）に詳しい。直前の民國18年（1929）に出版された『雙鑑樓善本書目』卷2 史部にはこの『遼史』が著録されている：

『遼史』一百十六卷

元刊本，十行二十二字，黒口，四周雙闌。

直後の昭和5年（1930）に出版された『文求堂善本書目』史部ではこの記述を基礎と

しながらも、書誌情報をやや加えている：

『遼史』一百十六卷

〈廿三冊 八百圓〉

元刊本，十行二十二字，黒口，四周雙闌。卷百十一至百十五共五卷鈔補。

ただ、補足部分は「卷百一至百十五共十五卷鈔補」とあるべきだろう。『文求堂善本書目』には巻1初葉右半の書影が掲載されているが、その第1, 2行下端には「傳增湘 / 讀書」朱文方印が確認できる。『天理圖書館稀書目録：和漢書之部 第四』は昭和35年(1960)刊『稀書目録：和漢書之部 第三』以降、平成10年(1998)までに増加した和漢書稀書を収めたものというから、その間に天理圖書館に入蔵したものである。

2.4.3 靜嘉堂文庫藏本(靜嘉堂本)

『靜嘉堂文庫漢籍分類目録』(昭和5年(1930)刊)二史部・一正史類に「遼史 〈116卷 / 元托克托等奉敕撰 元刊〉 10【冊】 2【函】 23【架】 冊」とある。末尾の略稱が示すように、この本は清末四大藏書家に数えられる浙江歸安の陸心源(字は剛甫, 號は存齋、潛園, 1838-94)の藏書樓の一、甬宋樓の舊藏書である²⁷⁾。心源歿後の明治40年(光緒33年, 1907), 島田翰(字は彦禎, 東京人, 1879-1915)の仲介で陸氏藏書樓の甬宋樓、十萬卷樓、守先閣の藏書4萬餘冊が子息陸樹藩(1868-1926)から東京三菱財團の岩崎彌之助(1851-1908)に買い取られ、その創設にかかる靜嘉堂文庫に収められることとなったのは周知のとおりである(島田翰1907)。

陸心源撰『儀顧堂續跋』(光緒18年(1892)自序)巻6「元槧『遼史』跋」はこの『遼史』版本について次のように記す：

『遼史』一百十六卷，首行小題在上，大題在下，次行題「開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、中書右丞相、監修國史、領經筵事、都總裁臣脫脫奉敕修」。前有至正三年三月十四日、二十八日聖旨二道，及脫脫進表，及修史官：都總裁脫脫、總裁官鐵陸爾達世等、纂修官廉惠山海牙等、提調官伯彥等銜名。目錄後有「紀三十卷、

27) 陸心源については林淑玲(2005)を参照。

志三十一卷」,「表八卷、列傳四十六卷」,「總一百十六卷」三行,及校勘臣彭衡、岳信、楊鑄、牟思善、卜勝、揭模姓名。每頁二十行,每行二十二字,版心刊工姓名,間有黑質白章者。明北監本削去聖旨及總裁、纂修、提調官銜名,則此書似出脫脫一人之手矣,殊非事實。又移目錄、總紀、志、表、傳卷數于前,改大題在上,小題在下。證以此本,可見唐、宋以來史家舊式,元人尚未改也。據脫脫進表,是書爲廉惠山海牙、王沂、徐曷、陳繹曾所分纂。案:海牙,字公亮,希憲從孫。延祐進士,官至翰林學士、知制誥。『元史』有傳。陳繹曾,字伯敷,烏程人。諸經注疏皆能成誦,爲文汪洋浩博,其氣偉如。官至國子監助教。『元史』附陳旅傳。王沂,字思魯,眞定人。延祐進士,官至翰林直學士、知制誥。著有『伊濱集』。惟徐曷無攷。史雖言海牙預修三史,未必有秉筆之才,徐曷亦素無文名,是『遼史』之成,當出王、陳二人之手。史無沂傳,而繹曾傳亦不言其曾修『遼史』,亦『元史』疏略之一端也。

河田龍編『靜嘉堂秘籍志』(大正6年(1917)自序)卷4史部・正史類は「『遼史』〈元脫脫等撰〉元刊十本」について:

〈志〉『遼史』一百十六卷。〈元刊本〉

元開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、中書右丞相、監修國史、領經筵事、都總裁臣脫脫奉敕修。

至正三年詔旨。進遼史表。修史官員銜名。

と記したのち、「案『儀顧堂續跋』云」として上掲の陸心源題跋を引いている。また、『靜嘉堂文庫宋元版圖録』(平成4年(1992)刊)解題篇は下記のように著録する:

171 遼史 〈116 卷 / 元脫脫(托克托)等奉敕撰 元刊明修〉 10 冊

〔寸法〕 28.0×17.0 糎

〔序目〕 〃聖旨(至正三〈1343〉三月十四日) 〃進遼史表 〃修史官員銜名 〃遼史目錄

〔版式〕 左右雙邊(20.6×15.0 糎) 有界 每半葉 10 行 注文雙行 22 字 版心粗黑

口 雙黒魚尾 刻者姓名 大小字數

刻者姓名【略】

備考。藏書印 狎鷗館 姚應年印 狎鷗後人永保用 歸安陸樹聲叔桐父印

。秘籍志卷4ノ20

これらの記述から判るように、靜嘉堂本は首卷の「遼史目錄」の前に「聖旨」と「進遼史表」、「修史官員」のみを存し、「三史凡例」を缺く。このことは『儀顧堂續跋』卷6の「元槧『遼史』跋」の次に收められる「明抄『遼史』跋」に「題、銜、行款皆與元刊同。聖旨，進表，總裁，修史提調銜名，亦同。惟修三史凡例六條，爲元刊所無。」と言われることによっても明らかである。なお、藏書印の陸樹聲（字は叔桐，1882-1933）は心源の三子で樹藩の弟である。その他の印は江蘇常熟の姚齊宋（字は再元，號は古愚，狎鷗軒，1737-1803）のものか（待考）。『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』圖版篇にはこの本の卷1初葉右半の書影が掲げられている。

この本はまた、陸心源編『皕宋樓藏書志』（光緒8年（1882）序）卷19史部・正史類二に著録されている。内容は首卷の「聖旨」「進遼史表」「修史官員」の引用のみで、陸心源自身の案語は無い。しかしながら、この本の版本上の性格を知るのには役立つ点があるので、長くなるが以下に引用する：

『遼史』一百十六卷（元刊本）

元開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、中書右丞相、監修國史、領經筵事、都總裁臣脫脫奉敕修。

詔旨：至正三年三月十四日，篤憐帖木兒怯薛第三日，咸甯殿裏有時分，速古兒赤江家奴、云都赤蠻子、殿中俺都刺哈蠻、給事中孛羅帖木兒等有來，脫脫右丞相、也先帖木兒平章、鐵陸爾達世平章、太平右丞、長仙參議、孛里不花郎中、老老員外郎、孛里不花都事等奏：「遼、金、宋三國史書不曾纂修來，歷代行來的事跡合纂修成書有，俺商量來。如今，選人將這三國行來的〔事〕跡交纂修成史，不交遲滯。但凡合舉行事理，俺定擬了呵，怎生？」奏呵，奉聖旨：「那般者。」三月二十八日，別兒怯不花怯薛^{ママ}第二日，咸甯殿裏有時分，速古兒赤不顏帖木兒、

云都赤蠻子、殿中俺都刺哈蠻、給事〔中〕李羅帖木兒等有來，脫脫右丞相、也先帖木兒平章、鐵陸爾達世平章、太平右丞、吳參政、買木丁參議、長仙參議、韓參議、別里不花郎中、王郎中、老老員外郎、孔員外郎、觀音奴都事、李里不花都事、杜都事、直省舍人倉赤也先、蒙古必閣赤鎖住、都馬等奏：「昨前，遼、金、宋三國行來的事跡，選人交纂修成史書者麼這，奏了來。這三國爲聖朝所取，制度、典章、治亂、興亡之由，恐因〔歲〕久散失，合遴選文臣，分史置局，纂修成書，以見祖宗盛德得天下遼、金、宋三國之由，垂鑑後世，做一代盛典。交翰林國史院分局纂修，職專其事。集賢、秘書、崇文并內外諸衙門裏，著文學博雅、才德秀潔，堪充的人每斟酌區用。纂修其間，予奪議論，不無公私偏正，必須交總裁官質正是非，裁決可否。遴選位望老成，長於史才，爲衆所推服的人交做總裁官。這三國寔錄、野史、傳記、碑文、行寔，多散在四方，交行省及各處正官提調，多方購求，許諸人呈獻，量給價直，咨達省部，送付史館，以備采擇。合用紙札、筆墨，一切供需物色，於江西、湖廣、江浙、河南省所轄各學院并貢士莊錢糧，除祭祀、廩膳、科舉、修理存留外，都交起解將來，以備史館用度。如今省裏脫脫右丞相、監修國史做都總裁，交鐵陸爾達世平章、太平右丞、張中丞、歐〔陽〕學士、呂侍御、揭學士做總裁官。提調官，省裏交也先帖木兒平章、吳參政，樞密院裏塔失帖木兒同知、姚副樞，臺裏狗兒侍御、張治書、買木丁參議、長仙參議、韓參議、右司王郎中、左司王郎中、老老員外郎、孔員外郎、觀音奴都事、杜都事，六部各委正官并首領官提調。其餘修定的凡例、合行事理，交總裁官、進遼史表曰：開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、中書右丞相、監修國史、領經筵事臣脫脫言：竊惟天文莫驗於璣衡，人文莫證於簡策。人主監天象之休咎，則必察乎璣衡之精。監人事之得失，則必考乎簡策之信。是以二者所掌，俱有太史之稱。然天道幽而難知，人情顯而易見。動靜者吉凶之兆，敬怠者興亡之機。史臣雖述前代之設施，大意助人君之鑑戒。遼自唐季，基〔于〕朔方。造邦本席於干戈，致治能資於黼黻。敬天尊祖，而出入必祭。親仁善鄰，而和戰以宜。南府治民，北府治兵。春狩省耕，秋狩省斂。吏課每嚴於芻牧，歲飭屢賜乎田租。至若觀市赦罪，則脗合六典之規。臨軒策士，則恪遵三歲之制。享國二百一十九載，政刑日舉，品式備具，蓋有足尚者焉。迨夫子孫失御，上下離心。驕盈盛而釁隙生，

讒賊興而根本蹙。變強爲弱，易於反掌。吁，可畏哉！天祚自絕，大石苟延。國既丘墟，史亦蕪蕪。耶律儼語多避忌，陳大任辭乏精詳。五代史繫之終篇，宋舊史掄諸載記。予奪各徇其主，傳聞況失其真。我世祖皇帝一視同仁，深加愍惻。嘗敕詞臣撰次三史，首及於遼。六十餘年，歲月因循，造物有待。臣脫脫誠惶誠恐頓首頓首，欽惟皇帝陛下，如堯稽古，而簡寬容衆。若舜好問，而濬哲冠倫。講經兼誦乎祖謨，訪治旁求乎往牒。茲修史事，斷自宸衷。睿旨下而徵聘行，朝士賀而遺逸起。於是命臣脫脫以中書右丞相領都總裁，中書平章政事臣鐵陸爾達世、中書右丞今平章政事臣賀惟一、御史中丞今翰林學士承旨臣張起巖、翰林學士臣歐陽玄、侍御史今集賢侍講學士兼國子祭酒臣呂思誠、翰林侍講學士臣揭傒斯奉命爲總裁官。中書選儒臣宗文太監今兵部尚書臣廉惠山海牙、翰林直學士臣王沂、秘書著作佐郎臣徐昂、國史院編修官臣陳繹曾分撰『遼史』。起至正三年四月，迄四年三月。發故府之積藏，集遐方之匭獻，蒐羅別抉，刪潤斫劑。紀、志、表、傳，備成一代之書。臧否是非，不迷千載之寔。臣脫脫叨承隆寄，幸觀成功。載宣日月之光華，願效涓埃之補報。我朝之論議歸正，氣之直則辭之昌。遼國之君臣有知，善者喜而惡者懼。所撰本紀三十卷、志三十一卷、表八卷、列傳四十六卷，各著論贊，具存體裁，隨表以聞。上塵天覽，下情無任慚懼戰汗屏營之至。臣脫脫誠惶誠恐頓首頓首謹言。至正四年三月一日，開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、中書右丞相、監修國史、領經筵事臣脫脫上表。

修史官員

都總裁：開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、中書右丞相、監修國史、領經筵事臣脫脫。總裁官：光祿大夫、中書平章政事、知經筵事、提調都水監臣陸爾達世。榮祿大夫、中書平章事、知經筵事臣賀惟一。翰林學士承旨、榮祿大夫、知制誥兼修國史臣張起岩。翰林學士、資善大夫、知制誥、同修國史臣歐陽玄。集賢侍講學士、通奉大夫兼國子祭酒臣呂思誠。翰林侍講學士、中奉大夫、知制誥、同修國史、同知經筵事臣揭傒斯。纂修官：正議大夫、兵部尚書臣廉惠山海牙。翰林直學士、朝請大夫、知制誥、同修國史兼經筵官臣王沂。文林郎、秘書監著作佐郎臣徐昂。將仕佐郎、翰林國史院編修官臣陳繹曾。提調官：資德大夫、中書右丞臣伯彥。榮祿大夫、中書左丞臣姚庸。奉議大夫、參議中書省事臣長仙。通

議大夫、參議中書省事臣呂彬。朝散大夫、中書右司郎中臣悟良哈台。嘉議大夫、中書左司郎中臣趙守禮。亞中大夫、中書左司員外郎臣僕哲篤。亞中大夫、中書省左司員外郎臣何執禮。儒林郎、右司都事臣觀音奴。奉議大夫、左司都事臣烏古孫良積。嘉議大夫、禮部尚書臣王守誠。中憲大夫、工部尚書臣丁元。奉議大夫、禮部侍郎臣老老。嘉議大夫、禮部侍郎臣杜秉彝。

聖旨（詔旨）の引用は完全ではなく、末尾に續くべき「修史官集議舉行呵，怎生？奏呵，奉聖旨：那般者。」18字がここでは引かれていない。この18字は「聖旨」第3葉に書かれている部分であり、ちょうどその18字を缺くのは、陸心源舊藏本が「聖旨」第3葉を缺いていたからに外ならない。他の點でもこの引文はこの版本について示唆を與えるが、その點はあとで述べる。

2.4.4 重慶圖書館藏本（重圖本）

『重慶圖書館古籍普查登記目錄』（2017年刊）に「500000-8701-0000040 B02/2:7/0040 遼史一百十六卷（元）脫脫等撰 明初刻本 二十四冊」と登録されている。この本は『中國古籍善本書目』が重慶市圖書館（現重慶圖書館）藏「明初刻遞修本」とするもので、2009年公布「第二批國家珍貴古籍名錄」にも「明初刻遞修本」として選定されている（名錄編號 03575）。

『第二批國家珍貴古籍名錄圖錄』には次項の南京圖書館藏本とともに「03575、03576 遼史一百十六卷（元）脫脫等撰 明初刻遞修本 / 匡高 21 厘米，廣 15.8 厘米。半葉十行，行二十二字，黑口，左右雙邊。重慶圖書館藏，有“藝風堂藏書”等印；南京圖書館藏，存九十九卷。」と説明され、卷1初葉右半の書影が掲載されている。その半葉には、初行上欄外に「雲輪閣」朱文長方印，小題（本紀第一）と大題（遼史一）の間に「荃孫」朱文長方印が見え、また、この葉には見えないが解説に「藝風堂藏書」印があるといい、清末民初の目錄學大家繆荃孫（字は炎之、筱珊，號は藝風，江蘇江陰人，1844-1919；藏書室名は藝風堂）の舊藏書であることが判る²⁸⁾。繆荃孫撰『藝風藏書記』（光緒27年（1901）自序）卷4史學第五に著録されるのがこの本であろう：

28) 繆荃孫およびその藏書については張碧惠（1991），楊洪升（2008）を参照。

『遼史』一百六十卷

元刊本。首卷有至正三年三月十四日、三月二十八日聖旨兩道，又脫脫等進遼史表，修史官員：都總裁、總裁官、纂修官、提調官及校勘諸銜名。每葉二十行，每行二十一字，板心列刊工姓名。

卷1初葉初行には他に，下から「陳立炎」朱文長方印、「重慶市 / 圖書館 / 藏善本」朱文方印、「浩廷」白文長方印がある。第一の印は繆荃孫の歿後その子繆祿保（1887-?）から蔵書の大部分を購入した上海の古書流通處（1925年廢業）主人陳琰（字は立炎，浙江海寧人）のものであり²⁹⁾，第三の印は北平の富晉書社主人王富晉（字は浩廷，河北冀州人，1889-1956）のものともみられる。彼ら書買の手を経て重慶圖書館の藏に歸したことが窺える。

2.4.5 南京圖書館藏本（南圖本）

『南京圖書館古籍普查登記目錄』（2019年刊）に「320000-1601-0038056 112138 遼史一百十六卷（元）脫脫等撰 明初刻本 二十七冊 存九十九卷（十八至一百十六）」とある。『中國古籍善本書目』も南京圖書館に「明初刻本」の殘本が所藏されるとするが，「第二批國家珍貴古籍名錄」ではこの本を重慶圖書館藏本と同じく「明初刻遞修本」と認定している（名錄編號 03576）。

『第二批國家珍貴古籍名錄圖錄』では重圖本と同頁で紹介され書影は省かれているが，『江蘇第二批國家珍貴古籍名錄圖錄』には「遼史一百十六卷 元脫脫等撰 / 明初刻遞修本。存九十九卷（十八至一百十六）。半葉10行，行22字，黑口，左右雙邊，框高22厘米，寬16.2厘米。南京圖書館藏。國家名錄號03576。」として卷18初葉右半の書影が掲載されており，第3,4行下方に下から「八千卷 / 樓藏 / 書印」朱文方印、「濟陽 / 文府」朱文方印、「江蘇第一 / 圖書館 / 善本書 / 之印記」朱文方印の3印が確認できる。八千卷樓は言うまでもなく清末四大蔵書家に數えられる浙江錢塘の丁申（字は禮林，號は竹舟，1829-87）、丁丙（字は嘉魚，號は松生，1832-99）兄弟の蔵書樓であり（濟

29) 上海古書流通處およびその繆荃孫舊蔵書の購書については陳乃乾（1943）を參照。繆荃孫舊蔵書の流散については楊洪升（2008: 169-187）を參照。

陽は丁氏の郡望)³⁰⁾、彼ら歿後の光緒33年(1907)に子息がその藏書を賣りに出したとき、繆荃孫らの盡力によってその藏書が同年に設立された江南圖書館(初代總辦(館長)は繆荃孫)によって購入、收藏され、陸心源舊藏書のような海外流出を免れたことはよく知られている(石祥2021: 98-137)。江南圖書館はその後、民國元年(1912)に江南圖書局、同2年(1913)に江蘇省立圖書館、同8年(1919)に江蘇省立第一圖書館、同16年(1927)に第四中山大學(翌年、江蘇大學、次いで國立中央大學と改名)國學圖書館、同18年(1929)に江蘇省立國學圖書館と改稱を重ね、新中國成立後の1952年に南京圖書館となって現在に至る。

丁丙『善本書室藏書志』(光緒26年(1900)繆荃孫序)卷6史部一には以下のよう
に『遼史』「元至正刊本」一部が著録されるが、これがこの本に違いない。

『遼史』一百六十卷(元至正刊本 黃堯圃、汪閩原藏書)

開府儀同三司、上柱國、錄軍國重事、前中書右丞相、兼修國史、領經筵事、都總裁臣脫脫等奉敕修³¹⁾

卷前有至正三年三月十四日、三月二十八日聖旨兩道、其一云：「篤憐帖木兒怯薛等奏³²⁾：「遼、金、宋三國史書不曾纂修來，歷代行來的事跡合纂修成書有，俺商量來。如今選人將這三國行來的事跡交纂修成書，俺定擬了呵，怎生？」奏呵，奉聖旨：「那般者。」其一復文事語略同。又脫脫等進『遼史』表，修史官員：都總裁、總裁官、纂修官、提調官及校勘諸銜名。凡紀三十卷，志三十一卷，表八卷，列傳四十六卷，國語解一卷³³⁾。書雖脫脫表上，而分纂者爲廉惠山海牙、王沂、徐昂、陳繹曾。以二百年之事實，又書禁素嚴之國，遺籍無徵，不及一載遽爾藏功，

30) 錢塘丁氏と八千卷樓については沈新民(1991)、石祥(2021)を参照。

31) 撰者の官銜が「前中書右丞相」となっているのは、本書で『遼史』の前に著録される『宋史』の署銜を書き寫したためであろう。脱脫は『遼史』成書時點ではまだ中書右丞相であったため、『遼史』の署銜では「前」は無い。「兼修國史」も「監修國史」の誤寫(『宋史』條では正しく著録される)。

32) これは原文の曲解に基づく。「篤憐帖木兒」は怯薛長の名であって、上奏者は脱脫以下の人物である。

33) 「列傳四十六卷」は「國語解」を含む卷數であり、「國語解」を別に立てるのであれば、「列傳四十五卷」とすべきである。また、「志」は名目上は第三十一までであるが、第十七が上下巻に分かれるので、缺巻が無いのであれば「志三十二卷」とするのが正しい。

宜乎潦草疏略矣。此書每葉二十行，行二十一字，版心列刊工姓名，乃浙江行省杭州府刊版也。有「黃丕烈」、「堯翁」、「汪士鐘印」三印。丕烈，字紹武，號堯圃，晚號復翁，吳縣人。乾隆戊申，舉人。家富藏書，得宋刻百餘種，顧菴顏其室曰「百宋一廬」，其藏書室曰「士禮居」，又曰「讀未見書齋」。同縣潘文勤刻其藏書題跋行於世³⁴⁾。

ハーバード燕京圖書館現藏（薄井恭一舊藏）稿本『八千卷樓藏書志』（光緒23年（1897）丁丙識語あり）卷6史部（乙部善本書目）・正史類にも「『遼史』一百十六卷〈元脫脫撰 元至正刊本 黃堯圃、汪閩原先後藏〉」とあり³⁵⁾，また『八千卷樓書目』（光緒25年（1899）羅渠、孫峻序）卷4史部・正史類に「『遼史』一百十六卷〈元托克托等撰 元刊本 南監張邦奇刊本 北監沈淮刊本 殿本 蘇局本 同文局本 竹簡齋本〉」と所藏する諸版本を列挙する中に「元刊本」が見える。

この版本が江南圖書館に入藏したことは，同館最初の善本書目である『江南圖書館善本書目』（宣統2年（1910）以前編纂³⁶⁾）史部第二十號に「『遼史』百六十卷〈同上【「元克托克」（「托克托」の誤）を指す】 元至正刊本 黃堯圃、汪閩原藏書〉三十二本」とあり，また『江蘇第一圖書館覆校善本書目』（民國7年（1918）刊）史部第二十號箱に「『遼史』一百十六卷〈元托克托等 元至正刊本 黃堯圃、汪閩原藏書 有「黃丕烈」、「堯圃翁」、「汪印士鐘」、「顧印千里」四印〉三十二冊」とあるのに續いて，以後，『江蘇省立國學圖書館圖書總目』（民國23年（1934）刊），『江蘇省立國學圖書館現存書目』（民國37年（1948）刊）等に著録されることから判る。趙鴻謙「宋元本行格表」（1928年）十行には「元至正本『遼史』行二十二字〈一百十六卷〉 黃堯圃、汪閩源藏書 版心記刻工姓名，爲浙江行省杭州府刊本，寬五寸七分，長六寸九分 全書一千零三十一頁 瞿目同，惟多「三史凡例」。』とあって，南京圖書館藏本には『遼史』首卷の「三

34) [清] 黃丕烈撰，[清] 潘祖蔭（諡號は文勤，江蘇吳縣人，1830-90）輯『士禮居藏書題跋記』（光緒8年（1882）潘跋）を指す。ちなみに，本書を含め現在までに編輯された黃丕烈題跋集には『遼史』の題跋は含まれていない。

35) 本藏書志については長澤規矩也、薄井恭一（1941）を参照。

36) 江蘇省立國學圖書館（1935: 19）に「本館當清宣統二年十一月開始閱覽之前，由編纂丁國鈞、王懋鎔編成『江南圖書館善本書目』一冊，亦名『初校善本書目』，均係錢塘丁氏善本書室舊藏，現歸善本甲庫。」とある。王懋鎔については林振岳（2023）を参照。

史凡例」が缺けていたことがここからも判る。現在この本は巻 17 までの 5 冊を失っているが、その缺失がいつ、またなぜ生じたかは明らかでない。

2.4.6 山西博物院藏本（晉博本）

2010 年公布の「第三批國家珍貴古籍名録」には山西博物院（2005 年に山西省博物館より改稱）圖書館所藏の「明初刻本」殘本が選定されている（名録編號 07560）。これは、『中國古籍善本書目』で山西省文物局の所藏とされていた「明初刻本」殘本が移管されたものである³⁷⁾。『山西博物院古籍善本圖目』（2017 年刊）には次のように著録される：

43 遼史一百十六卷（元）脱脱等撰 明初刻本 八冊

半葉十行二十二字，黒口，左右雙邊，雙對花魚尾。框高 21.4 厘米，廣 15.7 厘米。存十六卷（三十一至四十六）。藏印“雙鑑樓藏書印”（朱文）。版心下題刻工：志通、劉寶、林安等。傅增湘舊藏。入選第三批國家珍貴古籍名録（07560）和第三批山西省珍貴古籍名録（00361）。

『山西博物院古籍善本圖目』には巻 31（志第一）の初葉右半の寫眞が、『第三批國家珍貴古籍名録圖録』には見開きで巻 40（志第十）の初葉左半と第 3 葉右半（第 2 葉を缺くらしい）の寫眞が掲載されている。上記引文にもあるように、巻 31 初葉右下端には「雙鑑樓 / 藏書印」朱文長方印が見え、傅增湘の舊藏書と判る。山西博物院圖書館現藏の 600 餘種の善本古籍のうち 200 餘部が傅增湘の舊藏書というが（肖君 2017）、これもその 1 部である。

3 洪武刊諸本の相對年代

本節では、洪武刊諸本に見られる版本上の差異から、諸本間の新古關係を論じる。同版本である洪武刊本内での新舊という點では、『北京圖書館善本書目』（1959 年刊）

37) 谷錦秋（2018）によれば、2007 年に山西博物院圖書館が成立し、それまで山西省文物局資料室に保管されていた古籍が正式に移管された。

以來、「明初刻本」と「明初刻遞修本」との區別が設けられている。ところが、どのような觀點から兩者を區別しているのかは、書目という資料の性質上、詳しい説明がないため明らかでない。

筆者は、全文が閲覽可能な舊國立北平圖書館藏本（平圖甲本～己本）と新中國成立後の北京圖書館への寄贈本（翁本、瞿本、張本）の計9本および百衲本を比較照合することで、これら諸本に多くの異同が存在することを見出した。ここでは、個別の異同を網羅的に指摘するのではなく、諸本間の相對年代特定に決定的な役割を果たすもののみを取り上げて論じる。

3.1 舊國立北平圖書館および北京圖書館所藏諸本の新舊

3.1.1 補刻葉の有無

百衲本および靜嘉堂本に補刻葉が含まれることは尾崎（1989: 579）に指摘がある。原刻葉と補刻葉との違いは容易に識別できる。最も大きな違いは、原刻葉が原則として常に刻工名をその版心下部に刻む（下象鼻の右側に陽刻することが多いが、下象鼻の左側に陽刻する場合や、下象鼻のその線上に陰刻する場合もある）のに對し、補刻葉は刻工名を一切示さないことである。また、原刻葉は小黑口なのに對し、補刻葉は通例、大黒口である。字樣も、原刻葉の方が一般的には整っていて、補刻葉は相對的に拙劣である。ただ、この點は原刻葉であってもかなり拙劣なものがあるため、一概には言えない。

補刻葉に關して注目すべきことは、補刻葉の有無によって洪武刊諸本を完全に二分することができる點である。すなわち、各本は補刻葉が含まれるか、まったく含まれないかのどちらかであり、また、含まれる諸本では同じ位置にだけ補刻葉を含むということである。具體的には、補刻葉が含まれるのは瞿本と張本および百衲本のみで、翁本と6種の平圖殘本には補刻葉が一切含まれない。そこで、洪武刊本を、補刻葉が含まれる「補刻本系統」と、まったく含まれない「原刻本系統」とに分類することができる。當然、原刻本が古く、補刻本が新しい。補刻本で補刻葉が差し挟まれる位置は、次表のとおりである。

〔表2〕補刻本における補刻葉の位置

種別（葉數）	卷目	葉數	
首卷（30）	進遼史表	第2葉	
	修史官員	第1葉、第2葉	
	聖旨	第1葉 ³⁸⁾	
	遼史目錄	第20葉、第21葉	計6葉
本紀（244）	13本紀第十三	第1葉、第2葉	
	21本紀第二十一	第3葉、第4葉	計4葉
志（386）	31志第一	第1葉、第2葉、第3葉	
	33志第三	第4葉	
	35志第五	第10葉	
	44志第十四	第6葉、第31葉、第32葉	
	45志第十五	第3葉、第4葉、第5葉、第6葉、 第11葉、第12葉、第15葉、第16葉	
	50志第十九	第5葉	
	54志第二十三	第7葉、第8葉	
	56志第二十五	第5葉、第6葉	
	62志第三十一	第1葉、第2葉、第3葉、第4葉、第5葉	計26葉
表（123）	64表第二	第1葉、第2葉	計2葉
列傳（266）	80列傳第十	第3葉	
	83列傳第十三	第1葉、第2葉	
	102列傳第三十二	第3葉、第4葉	
	116國語解第四十六	第3葉、第4葉、第15葉、第16葉、 第17葉、第18葉、第21葉、第22葉	計13葉

同じ位置にだけ補刻葉があるということは、原刻葉を補刻葉に差し替える補修が一度だけ行なわれたということを意味する。ただし、この點は瞿本と張本という2種の補刻本のみに基づく推論であるから、瞿本と張本が偶々同時期の補刻本であったという可能性も排除できない。

上表を見て気づくのは、多くの場合、連続する奇數と偶數の葉がまとめて補刻葉に替えられていることである。この現象は、原刻葉の版木が両面彫りであったと考えれば容易に理解できる。補刻葉への差し替えが必要なほどの損傷が版木の片面に生じたときには、同時にもう片面も補刻葉への差し替えが必要な状態になっているのは自然なことである。

38) 瞿本、百衲本では原刻葉だが、南圖本が補刻葉である。瞿本、百衲本の原刻葉は原刻本からの補入だと考える。

補刻葉と原刻葉を比較すると、補刻葉にはかなり多くの誤脱が生じていることが判る。この點で、補刻本は原刻本に比べてテキストとしての價值が大きく劣る。百衲本が補刻本系統に屬することは注意してよい。

3.1.2 改刻の有無

これは張元濟が『校史隨筆』「遼史・句中疑字不當輕補」で指摘している現象だが、原版中の1字が「疑」以外にも「之」「詳」「非」「然」等で置き換えられている版本が存在する。これは埋木によって原版の一部のみを彫り替えたものだが、現存する洪武刊本に限って言えば、この改刻が見られる版本は補刻本に限られる。すなわち、瞿本と張本および百衲本でのみ見られる。

3.1.3 版木の損耗に伴う缺損

版木は使用を重ねれば重ねるほど缺損も増えていくが、そうした缺損は、印本の新舊に應じた損耗の程度の漸進的な變化として觀察されるときもあれば、ある段階を境とする急激な變化として觀察されるときもある。

前者の事例として、卷37地理志一の第12葉右半第6行の變化はその好例である。

乙本、丁本、戊本	：在宜州北一百六十里
甲本、丙本	：在宜州 <u>比</u> 一百六十里
翁本	：在宜州 <u>比</u> __百六十里
瞿本、張本	：在宜州 <u>比</u> <u>然</u> 百六十里
百衲本	：在宜州 <u>北</u> <u>然</u> 百六十里

平圖乙本、丁本、戊本はいずれも缺失がないのに對して、甲本、丙本では「北」の筆畫の一部に缺けが生じて「比」になり、翁本ではさらに「一」が缺失した。さらに補刻本系統の瞿本と張本ではその空所が「然」字に改刻されている。百衲本では補刻本を基にして「比」字を「北」に修正している。この漸進的變化から、これらの版本の細かな相對年代の違いを明らかにすることができる（己本はこの卷を缺くため不明）。

後者の事例として大きな欠損が生じている事例を見ると、巻66皇族表の第6葉右半の最下段に都林牙庶箴の子として「進士蒲魯」とある部分が、ある時期に丸ごと脱落する。この脱落前の状態を保存するのは丁本と戊本のみで、甲本、丙本、翁本、瞿本、張本および百衲本は保存しない（乙本と己本はこの巻を缺く）。また、巻68遊幸表の第7葉右半のやはり最下段、聖宗統和元年十二月の部分に「幸乾顯等州次遼河」とあったのが、ある時期に脱落する。脱落前の状態を保存するのは丁本のみで、戊本、甲本、丙本、翁本、瞿本、張本および百衲本は保存しない（乙本と己本はこの巻を缺く）。

もう1点、これは1字のみが脱落する例だが、巻77列傳第七の第5葉左半第10行に「今天下甫定稍緩一大事去矣」とある「一」字が、乙本と丁本では残存し、戊本、甲本、丙本、己本、翁本、瞿本、張本および百衲本では脱落している。

また、巻36兵衛志下は、翁本と瞿本、張本では第3葉左半の左上角と第4葉右半の右上角が同じ板木の表裏であるため對稱的に大きく缺けて一部の文字が失われているが、この欠損は乙本、丁本、戊本、甲本、丙本、己本では生じていない。

3.1.4 相對年代まとめ

以上に取り上げた巻葉での洪武刊諸本の版本上の差異を整理すると、下表のようにまとめることができる。表中、“+”は欠損など改新的な變化を、“-”は保守的な状態を、“/”は當該巻の不存を表わす。

〔表3〕舊國立北平圖書館藏本および北京圖書館寄贈本の相對年代

		A		B		C		D	
		77 (5)	68 (7)	37 (12)	66 (6)	36 (3,4)	補刻葉	改刻	
最早印本	丁本	-	-	-	-	-	-	-	
	乙本	-	/	-	/	-	-	-	
次早印本	戊本	+	+	-	-	-	-	-	
	丙本	+	+	+	+	-	-	-	
次後印本	甲本	+	+	+	+	-	-	-	
	己本	+	/	/	/	-	-	-	
最後印本	翁本	+	+	++	+	+	-	-	
補刻本	有改刻本	瞿本	+	+++	+	+	+	+	
	張本	+	+	+++	+	+	+	+	

表で示したように、まずはDの基準（補刻葉の有無、改刻の有無）から、補刻葉を含み、かつ改刻が見られる補刻本系統（瞿本、張本）と、それ以外の原刻本系統とに二分することができる。

原刻本系統は、Cの基準（巻36第3、4葉の欠損の有無）から、翁本のみを「最後印本」として分析できる。『北京圖書館善本書目』（1959年刊）で翁本は「明初刻遞修本」と審定されているが、「修」の条件を満たすような変化は認められず、他の原刻本系統の本とは「印」の違いしかない。

また、Bの基準（巻37第12葉の欠損、巻66第6葉の脱落の有無）から、丙本、甲本と丁本、乙本、戊本とを分けることができ、前者を「次後印本」とするなら、これと同じ分冊方式をもつ己本もここに含めるべきと考えられる。分冊方式が同じこの3本は、同印本と考えてよいと思われる。

最後に、Aの基準（巻77第5葉の脱落の有無、巻68第7葉の脱落の有無）によって戊本と丁本、乙本が分けられるが、前者は「次早印本」、後者は「最早印本」と呼ぶことができる。丁本と乙本は分冊方式も一致しており、同印本と考えてよいであろう。

3.2 その他の洪武刊本の新舊

その他の洪武刊本は（マイクロフィルムを含む）實見調査ができていないが、出版されている書影を主材料としてその新舊を判断することができる。

上圖本（『第一批國家珍貴古籍名錄圖錄』所收）、天理本（『文求堂善本書目』所收）、靜嘉堂本（『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』所收）、重圖本（『第二批國家珍貴古籍名錄圖錄』所收）は巻1初葉の書影を見ることができるが、版面の状態に著しい差異がある。

上圖本は現存する洪武刊本の中で最も版面が鮮明で版木の損傷が少ない。具體的には、上圖本で第5行第15字「氏」右下部の界線、第8行第10字「有」右下部の界線、同行第16字「如」右下部の界線に欠けが無いのに對して、確認可能な他の全ての洪武刊本は同箇所版木に欠けが生じている。清内閣大庫舊藏本中の最早印本である丁本と乙本が81巻と55巻しか存しないのに對して、それを遡る早印本である上圖本は111巻を存するというから、その価値は極めて高いと言わなければならない。

天理本は第2行第14-16字「事中書」左部の界線に欠けが生じているが、これは原

刻本系統の次後印本（甲本、丙本、己本）で新たに生じた缺損である。一方、最後印本（翁本）で生じた第2行第27-28字「事都」右部の界線の缺けは生じていないから、それより早い印本である。分冊方式が次後印本の3本とは異なっているから全くの同印本かは定かでないが、「遼史表」を巻63の前に置く特徴は合致しており、ほぼ同時期の印本と推定してよい。

静嘉堂本と重圖本は版面が至って漫漶で、補刻本系統の瞿本や張本と類似しており、同系統に属すると容易に判断できるが、その中でも晩期の印本であるように思われる。実際、静嘉堂本が補刻本であるのは陸心源『韶宋樓藏書志』の著録によって明らかである。同書に引用される『遼史』首卷「修史官員」は、補刻で生じた第1葉右半第7行の脱字（原刻葉の「鐵陸爾達世」を「陸爾達世」に誤る）と第2葉右半第2行の誤字（原刻葉の「伯顔」を「伯彥」に誤る）を反映している³⁹⁾。尾崎康（1989: 579）が「静嘉堂文庫藏の10冊にも明代の補刻葉があり、百衲本のものと同版と思われるが、両者に初葉から字句の異同があり」云々と言うのも、首卷「聖旨」初葉の補刻葉が第2行末の「日」字を「目」に誤っていることを指していると思われる⁴⁰⁾。

南圖本は『益山書影』所載の首卷「聖旨」初葉が補刻葉であり、補刻本であることが判明する。『江蘇第二批珍貴古籍名録圖録』では巻18初葉右半を見ることができ、第2行と第4行の上欄が缺損しており、補刻本系統の中でも瞿本より後印の本で、張本と同じ頃の印本であることがわかる。

晉博本は『山西博物院古籍善本圖目』掲載の巻31初葉が補刻葉であり、補刻本であることが判明する。『第三批國家珍貴古籍名録圖録』掲載の巻40についても、第1葉左半第6行末字「日」の中央横畫がほぼ缺損している點、第3葉右半第6行第8字「流」の最終畫の横線が缺けている點などが補刻本のみに見られる特徴である。

このように見てくると、『中國古籍善本書目』以來、上圖本が「明初刻本」、重圖本

39) 上で引いた陸心源『儀顧堂續跋』の記載「提調官伯彥等」にも誤字が反映されている。

40) 陸心源は文脈によって訂正可能な誤字は修正して引用しており、ここの「目」も「日」に修正されている。なお、點校修訂本『遼史』は首卷「聖旨」中の字句「倣一代盛興」の「興」字を「典」に改めるに当たって、「陸心源『韶宋樓藏書志』巻19引元刊本『遼史』所載「詔旨」をその根據としているが（1713頁）、これは陸心源が文意によって改めたと考えべき箇所であり、校勘の根據としては不適當である。

が「明初刻遞修本」と審定されていること、『中國古籍善本書目』で「明初刻本」とされていた南圖本が「國家珍貴古籍名録」で「明初刻遞修本」に改められたことは理解できるが、同名録で依然として晉博本が「明初刻本」と審定されていることには問題がある。なお、この名称を用いるならば、天理本は「明初刻本」、靜嘉堂本は「明初刻遞修本」ということになる。

4 首卷「遼史目録」の順序

刻工名を利用することで、明確な解を與えることができる問題がある。

『遼史』洪武刊本の首卷には、實際の目録である「遼史目録」の前に、「聖旨」「進遼史表」「三史凡例」「修史官員」と題される4種の資料が添えられている。このうち「進遼史表」と「修史官員」は『遼史』の成書後、皇帝への上表時に作成された文書で、本來的に『遼史』にのみ関わる資料であって、『遼史』と同時に編纂され、『遼史』に續いて順次完成した『金史』と『宋史』の首卷にも各々の「進書表」と「修史官員」が附されている。一方、「聖旨」は遼、金、宋三史の纂修を命ずる詔書を轉録したもの、「三史凡例」は首題が示すとおり遼、金、宋三史の編纂指針を示したものであり、ともに『遼史』のみならず『金史』『宋史』にも関わる文書である。これらが『遼史』の首卷に附されているのは、恐らく『遼史』が三史の中で最初に完成したからにすぎない。同様に、『金史』首卷には、江浙行省が中書省からの咨を受けて本省および杭州路の官員に遼、金二史の開板、印造を命ずる内容の、『遼史』にも関わる咨文が轉録されている。なお、『宋史』首卷にはこれに對應する文書として、宋史の開板、印造を命ずる江浙行省宛て中書省咨文と、江浙行省の提調官一覽が附されている。このように目録前に附された資料には性格の違いはあるが、『遼史』ではこれら4種の文書と目録が一括りにされ、版心にはすべて「遼史目録」と表記される。なお、『宋史』でも同様に首卷の版心はすべて「宋史目録」と題され、『金史』では江浙行省咨文の版心に「金史公文」とあるのを除いて「金史目録」と題される⁴¹⁾。

これら首卷に配される廣義の「遼史目録」は、その内部の構成順序が洪武刊諸本の間

41) 『宋史』は明成化刊本に、『金史』は至正刊本および洪武刊本による。

でも實に多様で一貫していない。本節では、この問題について論じ、その解決を試みる。

4.1 百衲本における首卷「遼史目錄」の順序

まず、百衲本『遼史』では下表のように排列される（表4）。参考のために『金史』『宋史』の目錄の順序も示す（表5, 6）。

〔表4〕百衲本『遼史』首卷「遼史目錄」の構成と順序

順序	首題	版心の標題	葉數	備考
(1)	聖旨	遼史目錄 一～三	3	至正3年 纂修遼金宋三史詔
(2)	進遼史表	遼史目錄 表一～表三	3	至正4年 中書右丞相脫脫上表
(3)	三史凡例	遼史目錄 四	1	
(4)	修史官員	遼史目錄 一～二	2	
(5)	遼史目錄	遼史目錄 一～二十一	21	

※明洪武刊本による

〔表5〕百衲本『金史』首卷「金史目錄」（および「金史公文」）の構成と順序

順序	首題	版心の標題	葉數	備考
(1)	進金史表	金史目錄上 一～四	4	至正4年 中書右丞相脫脫上表
(2)	修史官員	金史目錄上 五～八	4	
(3)	（無題）	金史公文 一～二	2	至正5年 印造遼金二史咨文
(4)	金史目錄上	金史目錄上 一～十	10	
(5)	金史目錄下	金史目錄下 一～二十二	22	

※元至正刊本による（現中國國家圖書館藏，善本書號 A00065）

〔表6〕百衲本『宋史』首卷「宋史目錄」の構成と順序

順序	首題	版心の標題	葉數	備考
(1)	進宋史表	宋史目錄表 一～五	5	至正5年 中書右丞相阿魯圖上表
(2)	修史官員	宋史目錄表 六～九	4	
(3)	（無題）	宋史目錄 十～十二	3	至正6年 印造宋史咨文、行省提調官
(4)	宋史目錄上	宋史目錄上 一～二十五	25	
(5)	宋史目錄中	宋史目錄中 一～三十四	34	
(6)	宋史目錄下	宋史目錄下 一～四十二	42	

※明成化刊本による（現中國國家圖書館藏，善本書號 07364）

中華書局の點校本および點校修訂本は、狹義の「遼史目錄」以外の4種の資料を「附録」として巻116の後に移しているが、その4種の順序は底本である百衲本にそのまま従っている。

尾崎康（1989: 578）は「首目は、百衲本では聖旨・進遼史表・三史凡例・修史官員・遼史目錄と續き、宋史や金史の例に照してこれが妥當かと思われる」と述べている。尾崎（1989: 582-583）は元至正刊本『金史』首卷の順序が、江浙行省咨文の後に「進金史表」と「修史官員」が續くものであったと考えているので、その順序に照らして妥當と言っているようである。尾崎（1989）が『金史』首卷の順序をそのように考える根拠は、その中文版（尾崎 2018: 690）に「據『百衲本』、『舊京書影』等知」とあるように、主に百衲本と『舊京書影』にあるらしい。確かに、『舊京書影』提要（1929年刊）は北平圖書館藏至正刊本『金史』（現國家圖書館藏，善本書號 A00065）について「元脱脱撰，元刻殘本。首至正五年中書省咨令杭州路錠梓、印造、裝褙咨文，次至正四年十一月阿魯圖進金史表，次修史官員、提調官銜名，次目錄上下。」云々と著録しており、その説に合致する。ところが、この本は繆荃孫『清學部圖書館善本書目』（1912年刊）には「首進金史表，次修史官員銜名，次提調官銜，次下杭州路印造牒及官銜。」と記載されている。また、この本は百衲本『金史』（1931年刊）の當該部分の影印底本にも使用され、「中華再造善本」として影印出版もされているが（2005年刊）、いずれも首卷は進金史表>修史官員>江浙行省咨文>目錄上下の順で排列されるので、『舊京書影』提要の記載は誤りと考えられる。『宋史』に至っては、「進宋史表」「修史官員」「中書省咨文」の順で版心の丁付が連續するから、これ以外の順序は考えがたい。したがって、まず尾崎（1989）が前提とする順序自體が妥當性を有たない。

さらに、尾崎（1989）が前提とする『金史』等の首卷の順序を假定しようがしまいが、百衲本『遼史』首卷で「三史凡例」が「進遼史表」と「修史官員」の間に置かれることは、『宋史』や『金史』に照らして妥當とは言えない。宋金兩史では「進書表」と「修史官員」の丁付が連續していることから示唆されるように、兩文書は一續きの資料として認識されていたものだが、それにも拘らず、百衲本『遼史』では兩者の間を「三史凡例」という性格の異なる資料が分斷してしまっている。この「三史凡例」は、版心の丁付からみて「聖旨」に後續すべきものであることに疑問の餘地は無い。

以上の議論から、本來の『遼史』首卷の排列順序がどうであれ、百衲本『遼史』の排列順序に問題があることは明らかである。

4.2 洪武刊諸本における首卷「遼史目錄」の順序と存缺

現存洪武刊諸本での首卷「遼史目錄」の排列順序と、一葉単位の存缺状況を整理すると、下表を得る。ただし、上圖本、天理本、靜嘉堂本、重圖本、南圖本の存缺と順序は書目類から得られる情報に基づき、それらは一葉単位の存缺が不明な場合が多いため項目ごとの存缺のみ示す。また、洪武刊本以降の代表的な版本として、明内府舊藏朱絲欄鈔本（臺灣國立故宮博物院書畫文獻處現藏）、明の南京國子監刊本（南監本、嘉靖8年（1529）刊）と北京國子監刊本（北監本、萬曆34年（1606）刊）、清の「欽定四庫全書」鈔本（乾隆間（1736-95）寫）、武英殿刊本（殿本、乾隆4年（1739）および道光4年（1824）刊）の情報も参考に示す⁴²⁾。下表は百衲本での順序に基づいて排列してあるが、表から知られるように百衲本と全く同一の排列順序をもつ版本は存在しない。

〔表7〕 洪武刊諸本における首卷「遼史目錄」の順序と存缺

標題	葉	衲本	原刻本系統					補刻本系統					他版本					
			丁本	戊本	甲本	丙本	翁本	上	天	瞿本	張本	靜	重	南	鈔	監	庫	殿
聖旨	一	①	①	/	/	/	③			①	/							
	二	①	/	/	/	/	③	1	1	①	/	1	1	1	1	/	/	/
	三	(1)	①	/	/	/	③			(1)	/							
進遼史表	表一	②	/	①	①	①	①			④	(1)							
	表二	②	/	①	①	①	①	3	0	④	(1)	2	2	2	3	1	1	1
	表三	(2)	/	①	①	①	①			(4)	(1)							
三史凡例	四	③	②	/	/	/	④	2	2	(2)	/	/	/	/	2	/	/	/
修史官員	一	④	③	②	/	①	②			③	(2)				4	2	/	/
	二	④	③	②	①	①	②	4	3	③	(2)	3	3	3				
遼史目錄	一	⑤	④	①	②	②	⑤			⑤	(3)							
	： 廿一	： ⑤	： ④	： ①	： ②	： ②	： ⑤	5	4	： ⑤	： ③	4	4	4	5	3	2	2

〔凡例〕 丸數字（①②等）は原刻葉，白抜き丸數字（②③等）は補刻葉，括弧付き數字（(1)(2)等）は補寫葉を示す。版面の一部のみ残存するものは網掛けで示す。0（①）は首卷には無く別の箇所に置かれるものを示す。斜線（/）は缺葉を示す。

略稱：上＝上圖本，天＝天理本，靜＝靜嘉堂本，重＝重圖本，南＝南圖本，鈔＝明朱絲欄鈔本，監＝南監、北監本，庫＝四庫本，殿＝乾隆、道光殿本

42) 『遼史』の諸版本については馮家昇（1933）の「序」と劉浦江（2015: 164-168）を参照。明朱絲欄鈔本は楊家駱主編（1973）の影印に據り，南監本、北監本は國立公文書館藏本に據る。四庫本は文淵閣本（『景印文淵閣四庫全書』臺灣商務印書館，1983-87年影印）に，乾隆殿本は臺灣藝文印書館1982年影印本に，道光殿本は京都大學文學部研究科圖書館藏本に據る。

「三史凡例」を缺く版本が多いが、保存する版本では百衲本を除いて「聖旨」の直後に置かれる。目を引くのは、「進遼史表」が首卷には無く卷63（表第一）の直前に置かれる原刻本系統の本が多いことである。これは、版心に「遼史目錄 表」と題される「進遼史表」の「表」と、版心に「遼表」と題される、紀、志、表、傳のうちの「表」（卷63-69）とを混同するという冗談のような誤解から生じた改新だが、遅くとも次早印本（戊本）ですでに生じており、その成立はかなり古い。

ところで、張元濟が百衲本二十四史の編纂、校勘作業で得た種々の知見を書き記した『校史隨筆』（1938年刊）では、『遼史』首卷の構成について次のように記される：

『遼史』與『宋史』，同於至正三年三月奉旨開修。卷首有三月十四日、二十八日聖旨各一道，次三史凡例，次四年三月進書表，次修史官員銜名。時本僅載進書表，餘均不存。

（遼史・元刊本疑非初刻）

張元濟が示した聖旨>三史凡例>進遼史表>修史官員>遼史目錄という排列順序は、百衲本とは「三史凡例」と「進遼史表」の順序が合わず、張元濟と交流のあった鐵琴銅劍樓主人瞿氏の有する洪武刊本（瞿本）とも「修史官員」と「進遼史表」の順序が合わない。無論、涵芬樓が藏した洪武刊本（張本）も首卷は不完全であってこれとも合わないのので、この順序が何に依據するのかは明らかでない。ただ、この排列順序は現存最古の印本である上圖本や、當時國立北平圖書館が藏した明内府舊藏朱絲欄鈔本の首卷「遼史目錄」の順序と一致し、多くの版本の祖型としても想定しうる順序である。例えば、ここから「三史凡例」が失われれば補刻本系統の靜嘉堂本、重圖本、南圖本の順序が生じるし、「進遼史表」を（他處に移すなどして）除けば丁本や天理本、延いては甲本や丙本の順序になりうる。このように、現存諸本の状態を説明するにはこの順序は都合がよい。しかし、このことはこの排列順序が『遼史』成立當初の順序であったということの意味するわけではない。

4.3 刻工名から見た首巻「遼史目録」の順序

洪武刊『遼史』の刊刻には多くの刻工が參與したことが版心下部に刻された刻工名から窺えるが、刻工は通例、連続する複数枚の版木を一人で擔當するので、刻工名の記載を手がかりに刊刻当時の排列順序を再現できる可能性がある。實際、この方法は期待どおりの成果を収める。すなわち、「修史官員」初葉の刻工は「進遼史表」末葉の刻工と、「聖旨」初葉の刻工は「修史官員」末葉の刻工と、「三史凡例」1葉の刻工は「聖旨」末葉の刻工と、「遼史目録」初葉の刻工は「三史凡例」（および「聖旨」末葉）の刻工とそれぞれ符合するため、これらの最も合理的な排列順序は下表に示す順序以外には考えがたい。

〔表8〕刻工名に基づく首巻「遼史目録」の復元

順序	標題	版心の表示	刻工名	備考
(1)	進遼史表	遼史目録 表一	范彦从	
		遼史目録 表二	彦从	補刻本では補刻葉（百衲本も同じ）
		遼史目録 表三	范彦从	補刻の有無未詳（百衲本は補寫葉 ⁴³⁾ ）
(2)	修史官員	遼史目録 一	范彦从	補刻本では補刻葉（百衲本も同じ）
		遼史目録 二	陳彦和	補刻本では補刻葉（百衲本も同じ）
(3)	聖旨	遼史目録 一	彦和 ⁴⁴⁾	補刻本では補刻葉（瞿本と百衲本は原刻葉）
		遼史目録 二	江子名	
		遼史目録 三	江子名	（百衲本は補寫葉 ⁴⁵⁾ ）
(4)	三史凡例	遼史目録 四	江子名	
(5)	遼史目録	遼史目録 一	江子名	
		：	：	
		遼史目録 二十一	刘伯安	補刻本では補刻葉（百衲本も同じ）

洪武覆刊の際、底本の順序に手を加えることがなかったとすれば、この順序が洪武刊本刊刻時の排列順序であるだけでなく、（少なくとも覆刊の底本に使用された）至正刊本での排列順序であったということにもなる。この順序は原刻本系統の最後印本である翁本の順序と一致するが、これは翁本が原型を保存しているのではなく、翁本の

43) 百衲本は補寫葉だが、刻工名も再現して原刻葉を装っている。

44) この刻工名は小黑口の下象鼻上に陰刻されているため判讀が困難だが、辛うじて読み取ることができる。

45) 百衲本は補寫葉だが、刻工名も再現して原刻葉を装っている。

舊藏者が何らかの基準に基づいて「遼史目録」を竝べ替えた結果とみるべきだろう。それはまさに刻工名を手がかりとする方法であったかもしれない。

ここに復元した首卷「遼史目録」の排列順序に合理性があることは他の観点からも支持される。最も有力な証左は、『遼史』と同時期に刊行された『金史』『宋史』との整合性である。前述のとおり、宋金兩史では進書表>修史官員>關係公文書>目録の順に資料が排列されているが(表5, 6), 『遼史』では「聖旨」および後續する「三史凡例」が關係公文書に当たるため、上の順序を認めたときにのみ、遼、金、宋三史の首卷の構成順序を同一の原理で説明することができる。

もう一點は、上で見た現存洪武刊諸本における祖型としてふさわしい、聖旨>三史凡例>進遼史表>修史官員>遼史目録という順序への移行が理解しやすいという点である。「進遼史表」および「修史官員」は至正4年の『遼史』纂了時の資料であるのに對して、「聖旨」および「三史凡例」は至正3年の『遼史』編纂開始時の資料であるから、『金史』『宋史』との構成上の竝行性を認識していない者が時系列に沿って兩者の順序を入れ替えたいくなる動機はよく理解できる。

以上に論じたように、明洪武刊本原刻葉に刻された刻工名という材料を利用することで、混亂の見られる『遼史』首卷「遼史目録」の内部構成について、元至正刊本にまで遡りうる本來の排列順序を明らかにすることができる。

5 百衲本の底本

百衲本『遼史』が影印出版したその底本がどの本であるかをめぐっては異なる見解が存在する。一般論としては、百衲本は封面裏に刊記を付してどの本を影印したかを記載するので、こうした問題は生じないように思える。例えば、『遼史』と同じく第2期(民國20年(1931)8月)に刊行された百衲本『金史』の封面裏には「上海涵芬樓借北平圖書館藏元至正刊本景印，闕卷以涵芬樓藏元覆本配補。原書版高營造尺七寸，寬五寸一分。」との記載があり、これによって底本が舊國立北平圖書館藏元至正刊殘本(清內閣大庫舊藏，中國國家圖書館現藏の善本書號A00064とA00065)であり，缺卷を自藏の明洪武刊本(蔣汝藻舊藏，國家圖書館現藏の善本書號07368)で補ったこと

が明らかとなる（尾崎康 1989: 580-588, 任文彪 2016）。ところが、百衲本『遼史』の刊記は「上海涵芬樓景印元刊本。原書版匡高營造尺六寸五分強，寬五寸一分。」と言うのみで、どの「元刊本」（実際には明洪武刊本）に據ったかを明示しない。ここに問題の元凶がある。本節では、諸家の見解ならびにその問題点を見た上で、關聯資料の探索と実際の文獻調査によって百衲本『遼史』の底本を明確にする。

5.1 諸家の見解とその問題点

5.1.1 國立北平圖書館藏本説

馮家昇（1933）は「遼史初校序」において『遼史』の諸版本について論じる中で、百衲本について次のような話を書き留めている：

按：此本與北平圖書館所藏元板，譌脫未有出入，余嘗取以互對，疑所據以影印者，必該館所藏之本，後與傅沅叔先生語，知百衲所據即北平圖書館之藏本，不足者，復據傅先生之元板明補本，以足其數也。

この説は、百衲本と北平圖書館所藏の洪武刊本とを照合したところ、兩者の誤脱部分に違いがなかったという馮自身の調査結果と、張元濟の百衲本出版事業に協力してその内實をよく知っていた傅增湘からの傳聞という2種類の根據に支えられている。

馮家昇（1904-70）はのちに中華書局の「點校本二十四史」出版事業において點校本『遼史』の編輯責任者となった。馮は完成を待たずに亡くなったため、陳述（1911-92）が點校作業を引き継いで完成させたが（劉浦江 2015: 168）、その『遼史』版本に對する見解は完成した點校本『遼史』（1974年刊）にも反映されている。中華書局編輯部名義で書かれた卷頭の「出版説明」には、「商務印書館影印の百衲本，係用幾種元末或明初翻刻本殘本拼湊而成，雖有不少脫誤，但也有許多勝於後出諸本的地方。」と百衲本の底本について斷じているが、この「幾種元末或明初翻刻本殘本」が舊北平圖書館所藏の6種の洪武刊殘本を指すことは明らかである。この認識に基づいて點校本『遼史』の「工作本」に百衲本が選ばれていることには注意したい。

さらにこの認識は、2007年から開始された點校本二十四史の修訂事業においても繼

承されている。北京大學の劉浦江（1961–2015）が修訂の責任者となってその門下で進められ2016年に出版された點校修訂本『遼史』の前言（劉浦江2015: 167）では、「1931年商務印書館以數種明初翻刻本殘本配補而成的百衲本『遼史』，是該書點校本問世之前最爲通行的版本。」という認識の下、改めて百衲本を底本とすることを厳格に遵守すると宣言している。現在の遼史研究においてはこのような認識がスタンダードな見解であると言ってよいであろう。

しかしながら、この説は致命的な矛盾を孕んでいる。もしも百衲本が主として當時の國立北平圖書館が藏した明洪武刊殘本を配補して成っているのであれば、これら殘本がいずれも原刻本である以上、少なくともそれら諸殘本によってカバーできる巻1から巻101までの範囲において、百衲本には基本的に補刻葉が現われないはずである。ところが実際には、その範囲の内外を問わず、百衲本では、補刻本で補刻葉が現われる位置にはほぼ常に補刻葉が現われている。このことは、百衲本が補刻本を主たる底本としていることを明確に物語っている。それとともに問題になるのは、舊北平圖書館藏本の6本をどのように組み合わせても巻102以降および首巻の一部をカバーすることができないことであり、馮説ではその不足部分を傅增湘藏本で補ったことになっているが、當時の傅氏藏書にそれが可能だったのか、検討の餘地がある。

5.1.2 上海涵芬樓藏本説

もうひとつの説は尾崎康（1989: 579）によるものである：

北京圖書館善本書目には、全116巻を備えた「明初刻遞修本」が、24冊・8冊・24冊（巻47配清抄本）と3本著録される。百衲本は當時の涵芬樓藏本を底本として、ごく少いが補刻とみえる葉があり、遞修とは確認できないが、右のうちの第一の24冊本であり、それは涵芬樓燼餘書録の著録によって知られる。

『北京圖書館善本書目』（1959年刊）に著録される第一の24冊本は「翁捐」と明示されているように常熟翁氏舊藏本（翁本）であり、涵芬樓舊藏本（張本）は第三の24冊本であるが（2.3節参照；中文版（尾崎2018: 687）では訂正されている）、百衲本の底

本が張本であることを明言している。ただし、當時北京圖書館（現中國國家圖書館）が所蔵していた張本を尾崎は直接調査したわけではないので、その根據や情報源が何であるかは明らかでない。百衲本底本にまつわる上の状況に鑑みるならば、その根據を明確にすることがぜひとも必要である。

この説の問題点を挙げるならば、底本とされる張本は『北京圖書館善本書目』にも註記されるように巻47が全葉補寫葉であり、また首巻も揃っていないのに對し、百衲本ではそれらに（全てではないが）補寫葉でない原版が使用されており、張本以外に使用された洪武刊本が存在したことが明らかな點である。張本が主たる底本であるにせよ、そのみで説明できない部分が残るのであれば、問題の完全な解決とは言えない。

5.2 百衲本二十四史關聯資料

結論から言えば、百衲本の主要な底本が張本（涵芬樓藏本）であることは疑いえない。この點を、主として百衲本出版時の同時代資料によって明らかにしよう。

『遼史』に限らず、張元濟が百衲本の底本がどの版本かを提示した資料はいくつか存在する。ただ、公式に出版された資料の中には、所蔵者まで特定できるような情報を記載したものはほとんどない。例えば「百衲本二十四史」出版時の購入者向け冊子『百衲本二十四史預約様本』（商務印書館 1930）所載の「百衲本二十四史版本述要」や、その重訂本『百衲本二十四史預約様本』（商務印書館 1934）所載の「百衲本二十四史版本一覽」は、刊本の種別についての記載しかもたない。實際の百衲本版本の封面裏の記載は一般的にはその貴重な情報源なのだが、上述のように『遼史』に関しては所蔵者を特定できるような表現にはなっていない。

一方、張元濟から傅增湘へと宛てた私信の中では、重要な情報が提示されているものが複数ある。1 點めは、民國 16 年（1927）10 月 27 日付書札の後に附されたもので、「《百衲本二十四史》擬用版本計劃」と題されて『張元濟全集』にも収録されている（商務印書館編 1983: 177-178, 張樹年、張人鳳 1997: 1141-1142, 張元濟 2010: 605）。二十四史について百衲本で使用豫定の版本を提示したもののだが、關係箇所のみ抜き出すと：

『新五代史』 用尊藏本。已校。

『宋史』 涵芬樓元刊本。

『遼、金二史』 又元刊本。已照。

『元史』 又明初本。

ここでは「宋史 涵芬樓元刊本」に續いて「遼金二史 又元刊本」とある。この「又」は「元刊本」の重出に對して用いられているように見えるが、さらに續く「元史 又明初本」という表現を考慮に入れるならば、この「又」が實は「涵芬樓」を承けて用いられたもの（すなわち「又元刊本」は「涵芬樓元刊本」を指す）と解釋できる可能性がある。ただし、ここに示されたものはあくまでも1927年時點での計劃であり、『遼史』が實際に出版される1931年8月までに計劃が變更された可能性は否定できない。

2點めは、張人鳳編（2003: 1254-1255）の附録二の中に「《百衲本二十四史》擬用版本一覽」と題されて収録されている資料で、張元濟（2010: 606）の編者に據れば1929年に書かれたものというが、同様に百衲本の各版本を示した中に次のようにある：

『新五代史』 用雙鑑樓藏宋本。

『宋史』 用北平圖書館藏殘元本，以涵芬樓藏明刊本補配。

『遼史』 用涵芬樓藏元本。

『金史』 用北平圖書館藏元刊本，缺卷以涵芬樓元覆本配。

『元史』 用北平圖書館藏洪武初印本，缺卷以涵芬樓藏後印本配。

このように百衲本『遼史』の使用版本が涵芬樓藏本（すなわち張本）であることが明確に示されている。ここに提示された版本は、いずれも最終的に百衲本が出版された際に實際に使用された版本と一致しており、信の置ける資料であると考えられる。

さらにもう1點、民國20年（1931）1月15日付傳增湘宛て書札（商務印書館編1983: 256-257，張樹年、張人鳳編1997: 1177，張元濟2007: 381；上海圖書館編2017第2卷: 173-174に原本の寫眞あり）から、關係箇所を示す：

鄴架所藏『遼、金兩史』均爲元刻，印刷精否？「衲史」所用之本，除『金史』借

照北平圖書館一部分外，其餘均用蔣氏轉讓之本，有若干卷板印不佳。極費手續，極思借用抽換，務祈俯允。

ここでは、張元濟が「百衲本二十四史」で使用する『遼史』『金史』版本について、『金史』の一部に國立北平圖書館藏元至正刊本を用いるのを除いて、他はすべて「蔣氏轉讓之本」を用いると述べている。この本は間違いなく、涵芬樓が入手した蔣汝藻舊藏書で、『遼史』に関しては本稿で言う張本を指す。なお、この書信では、その涵芬樓藏本の状態に満足していなかった張元濟がさらなる善本を求め、傅增湘の藏書目錄『雙鑑樓善本書目』（1929年刊）所載の『遼史』元刊本、『金史』元刊殘本についてその状態を訊ねたが、これに対する傅增湘の同月22日付返信（商務印書館編1983:257-258；上海圖書館編2017第7卷:218-223に原本の寫眞あり）では：

敝藏元本『遼史』已售去。祇存『遼史』二函、『金史』四函，均殘本，印本亦不清朗，視京館所藏乃別一刻，或是翻板也。如用可寄奉。

と述べられ、所藏する「元刊本」『遼史』がすでに賣却済みであり、手許には『遼史』殘本しか残っていないことが報告されている。ここで賣却済みと語られた「元本『遼史』」は文求堂書店の田中慶太郎が購入した天理本に違いなく、一方、手許に残っていた『遼史』殘本は晉博本を指すとみてよいであろう。この書信から、傅增湘藏本が百衲本『遼史』の影印底本として補助的に使用されたという馮家昇の説は否定される。當時傅增湘の手許にあって張元濟に提供可能であった晉博本は卷31-46のみを存する殘本であり、仮に百衲本底本が當時の北平圖書館藏諸殘本（卷102以降を缺く）であったとしても、張本（卷47を缺く）であったとしても、晉博本ではその缺を補うことができない。馮家昇が傅增湘から聞いたという話は、何らかの誤解によって生じたものと考えざるをえない。

以上より、百衲本『遼史』の主たる影印底本が涵芬樓に自藏されていた張本であることは、同時代資料から明らかだと思われる。翻って、百衲本『遼史』の封面裏に「上海涵芬樓景印元刊本」としか書かれないのは、發行主體と底本所藏者とが同じ場合には、

底本所藏者を自明のこととして省略しても問題ないとの判断があったものと思われる。同様の省略表記は「百衲本二十四史」の他の正史の封面裏記載でも見られる。

5.3 版本特徴からみた百衲本底本

「百衲本二十四史」が、単なる製版、印刷ではなく、時には大胆に原版に対して変更を加えるような「影印」手法を用いていることは、張元濟自身が『百衲本二十四史影印描潤始末記』（商務印書館 1933）で記し、「描潤」前と「描潤」後との違いを圖版で示しているとおりでである。したがって、底本であるはずの張本と百衲本『遼史』との間に局所的な視覚上の差異があったとしてもそれは大きな問題ではない。

一方、原刻葉が補刻葉に代わるような大局的な変化は、「描潤」で修正が利くような問題ではないので、そうした特徴の一致が百衲本の底本を確定する上では重要になる。補刻本で補刻葉が差し挟まれている紙葉が百衲本でも（ほぼ）すべて補刻葉であることは、百衲本の主要な底本が補刻本系統の張本であるという先述の資料調査の結果を支持する。ただし、既述のように張本は巻47の原葉を欠き、首巻も「遼史目録」を除いて原葉を欠くので、百衲本には必ず他の版本も併用されたはずである。ここでは、版本上の特徴を見ることで、この張本以外に補完的に使用された洪武刊本がどの本であるかが特定できることを論じる。

注目すべきは、百衲本首巻の特徴である。まず、張本が保存しない首巻部分にも補刻葉が混じることから、張本以外に使用された洪武刊本も補刻本であったことが判る。次に、見た目には違和感がないが、百衲本の「聖旨」第3葉と「進遼史表」第3葉は、実は商務印書館館員の手による補寫葉であり、原刻葉ではない。これは、張本以外に使用した洪武刊本の首巻にも缺葉があり、そうした對處をせざるをえなかったことを意味する。そして、「聖旨」第1葉は南圖本や靜嘉堂本のような補刻本系統の本では均しく補刻葉であるが、奇妙なことに百衲本ではなぜか原刻葉になっている。

この3点の特徴がいずれも適合するのが、當時の鐵琴銅劍樓主人瞿啓甲（字は良士）が所藏した瞿本である。瞿本は補刻葉を含む補刻本でありながら、なぜか「聖旨」第1葉には原刻葉が混じり、かつ「聖旨」第3葉と「進遼史表」第3葉は補寫葉が配されている（表7参照）。このように複数の特徴が合致することは偶然とは考えがたい。

しかも、瞿啓甲が張元濟と親交をもち、鐵琴銅劍樓の藏書を提供して「四部叢刊」や「續古逸叢書」、「百衲本二十四史」といった商務印書館の古籍影印事業に協力したことはよく知られている（曹培根 2018）。そればかりか、百衲本『遼史』が出版される数ヶ月前に、張元濟が瞿啓甲に對して瞿本の貸與を申し出ている書簡が實際に残されているのである（民國 20 年（1931）3 月 17 日付瞿啓甲宛て書信（張樹年、張人鳳編 1997: 1289–1290, 張元濟 2007: 523））：

前日造謁，未獲暢談。承示元刻『遼史』似較敝館所藏爲勝。茲倩丁君英桂携帶全部晉謁，乞檢示一校。窃再有不情之請，弟擬乞借至寓中詳細一看。倘蒙慨允，乞交丁君携下，冒昧〔瑣〕瀆，無任主臣。敬請良士仁兄大人臺安。

弟張元濟頓首 二十年三月十七日

諸位世兄均安

以上のように、版本上の特徴から見ても一次史料から見ても、百衲本『遼史』の底本には張本に加えて瞿本が併用されていると考えて間違いのないであろう。

ただし、1つだけ解決できない問題がある。瞿本は首巻のうち「三史凡例」原葉を缺くため補寫葉で補っているが、百衲本の「三史凡例」は原刻葉を用いている。かつ、その「三史凡例」の紙面の状態を詳しくみると、平圖丁本や翁本のような原刻本系統の本よりも劣化が進んでおり、補刻本系統の本の「三史凡例」であることが窺われる。この葉がどの刊本に出るのかは目下不明である。

附録：『遼史』明洪武刊諸本存佚表

【凡例】

記号	意味
○	原刻葉のみ
☆	原刻葉のみだが、改刻・修補のある葉あり
●	補刻葉あり
★	補刻葉あり、かつ改刻・修補のある葉もあり
〰	字句の缺損あり

- ・記號の右下の數字は缺葉數を示す
- ・補寫葉も缺葉と同じ扱いとする
- ・卷を分かつ實線は分冊の境界，破線は推定される分冊境界を示す

卷 卷目	葉	丁本	乙本	戊本	甲本	丙本	己本	翁本	瞿本	張本	衲本
首 遼史目錄	30	○ ₄		○ ₄	○ ₅	○ ₄	○ ₁₉	○	● ₃	● ₁₁	● ₂
1 本紀第一 太祖上	10	○		○	○	○	○	○	○	○	○
2 本紀第二 太祖下	8	○		○	○	○	○	○	○	○	○
3 本紀第三 太宗上	12	○		○	○	○	○	○	○	○	○
4 本紀第四 太宗下	16	○		○	○	○	○	○	○	○	☆
5 本紀第五 世宗一	3	○		○	○	○	○	○	○	○	○
6 本紀第六 穆宗一	6	○		○	○	○	○	○	○	○	☆
7 本紀第七 穆宗二	5	○ ₂		○	○	○	○	○	○	○	○
8 本紀第八 景宗一	5			○	○	○	○	○	○	○	○
9 本紀第九 景宗二	5			○	○	○	○	○	○	○	○
10 本紀第十 聖宗一	9			○	○	○	○	○	○	○	○
11 本紀第十一 聖宗二	9			○	○	○	○	○	○	○	○
12 本紀第十二 聖宗三	7			○	○	○	○	○	○	○	○
13 本紀第十三 聖宗四	9			○ ₂	○	○	○	○	●	●	●
14 本紀第十四 聖宗五	8			○	○	○	○	○	○	○	○
15 本紀第十五 聖宗六	12			○ ₁	○	○	○	○	○	○	○
16 本紀第十六 聖宗七	9			○	○	○	○	○	○	○	○
17 本紀第十七 聖宗八	9			○	○	○	○	○	○	○	○
18 本紀第十八 興宗一	9			○	○	○	○	○	○	○	○
19 本紀第十九 興宗二	8			○	○	○	○	○	☆	☆	☆
20 本紀第二十 興宗三	9			○	○	○	○	○	☆	☆	☆
21 本紀第二十一 道宗一	7			○	○	○	○	○	★	★	★
22 本紀第二十二 道宗二	8			○	○	○	○	○	☆	☆	☆
23 本紀第二十三 道宗三	7			○	○	○	○	○	○	○	○
24 本紀第二十四 道宗四	8	○		○	○	○	○	○	☆	☆	☆
25 本紀第二十五 道宗五	7	○		○	○	○	○	○	○	○	○
26 本紀第二十六 道宗六	6	○		○	○	○	○	○	○	○	○
27 本紀第二十七 天祚皇帝一	9	○		○	○	○	○	○	○	○	○
28 本紀第二十八 天祚皇帝二	7	○		○	○	○	○	○	○	○	○
29 本紀第二十九 天祚皇帝三	9	○		○	○	○	○	○	☆	☆	☆
30 本紀第三十 天祚皇帝四	8	○		○	○	○	○	○	☆	☆	☆
31 志第一 營衛志上	10	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●
32 志第二 營衛志中	8	○	○	○	○	○	○	○	○	☆	☆
33 志第三 營衛志下	10	○	○	○ ₁	○	○	○	○	○	●	●
34 志第四 兵衛志上	5	○	○	○	○	○	○	○	○	☆	☆
35 志第五 兵衛志中	10	○	○	○	○	○	○	○	○	● ₁	●

36 志第六 兵衛志下	14	○	○ ₁	○	○	○	○	○	☆	☆ ₁	☆
37 志第七 地理志一	14	○	○	○	○	○	○	○	☆	☆	☆
38 志第八 地理志二	17	○	○	○	○	○	○	○	☆	☆	☆
39 志第九 地理志三	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
40 志第十 地理志四	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
41 志第十一 地理志五	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
42 志第十二 曆象志上	15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
43 志第十三 曆象志中	11	○	○	○	○	○	○	○	☆	☆	☆
44 志第十四 曆象志下	40	○	○	○	○	○	○	○	●	● ₁	●
45 志第十五 百官	26				○	○	○	○	●	●	●
46 志第十六 百官志二	32				○	○	○	○	○	○	○
47 志第十七上 百官志三	20				○	○	○	○	○		○
48 志第十七下 百官志四	22				○	○	○	○ ₁	○	○	○
49 志第十八 禮志一	6	○	○		○	○	○	○	○	○	○
50 志第十九 禮志二	7	○	○		○	○	○	○	●	●	●
51 志第二十 禮志三、禮志四	12	○	○		○	○	○	○	○	○	○
52 志第二十一 禮志五	9	○	○		○	○	○	○	○	○	○
53 志第二十二 禮志六	15	○	○		○	○	○	○	○	○	○
54 志第二十三 樂志	15	○	○		○	○	○	○	●	●	●
55 志第二十四 儀衛志一	5	○	○		○	○	○	○	○	○	○
56 志第二十五 儀衛志二	6	○	○		○	○ ₄	○	○	●	●	●
57 志第二十六 儀衛志三	4	○	○		○	○	○	○	○	○	○
58 志第二十七 儀衛志四	5	○	○		○	○	○	○	○	○	○
59 志第二十八 食貨志上	4	○	○		○	○	○	○	○	○	○
60 志第二十九 食貨志下	5	○	○		○ ₁	○	○	○	○	○	○
61 志第三十 刑法志上	6	○	○		○	○	○	○	○	○	○
62 志第三十一 刑法志下	5	○	○		○	○	○	○	●	●	●
63 表第一 世表	8	○		○	○	○	○	○ ₁	○	○	○
64 表第二 皇子表	20	○		○	○	○	○	○	●	●	★
65 表第三 公主表	7	○		○	○	○	○	○	○	○	○
66 表第四 皇族表	8	○		○	○	○	○	○	○	○	○
67 表第五 外戚表	5	○		○	○	○	○	○	○	○	○
68 表第六 遊幸表	18	○		○	○	○	○	○	○	○	○
69 表第七 部族表	24	○		○	○	○	○	○	○	○	☆
70 表第八 屬國表	33	○ ₂		○ ₁	○ ₁	○ ₁	○ ₁	○ ₂	○ ₁	○ ₁	☆ ₁
71 史傳第一 后妃	9	○	○ ₃	○ ₃	○	○	○	○	○	○	○
72 宗室傳第二	7	○	○ ₂	○	○	○	○	○	○	○	○
73 列傳第三	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
74 列傳第四	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
75 列傳第五	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
76 列傳第六	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
77 列傳第七	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

78 列傳第八	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
79 列傳第九	4	○	○	○	○	○ ₁	○	○	○	○	○	○
80 列傳第十	5	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	
81 列傳第十一	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
82 列傳第十二	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
83 列傳第十三	6	○	○	○	○	○	○	○	●	●	★	
84 列傳第十四	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
85 列傳第十五	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	☆	
86 列傳第十六	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
87 列傳第十七	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
88 列傳第十八	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	☆	
89 列傳第十九	5	○	○	○	○	○	○	○ ₁	○	○	○	
90 列傳第二十	4	○	○	○ ₁	○	○	○	○	○	○	○	
91 列傳第二十一	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
92 列傳第二十二	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
93 列傳第二十三	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
94 列傳第二十四	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	☆	
95 列傳第二十五	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
96 列傳第二十六	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
97 列傳第二十七	4	○	○ ₃	○	○	○	○	○	○	○	○	
98 列傳第二十八	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
99 列傳第二十九	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
100 列傳第三十	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
101 列傳第三十一	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
102 列傳第三十二	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
103 列傳第三十三 文學上	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
104 列傳第三十四 文學下	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
105 列傳能吏第三十五	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
106 卓行傳第三十六	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
107 烈女傳第三十七	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
108 方技傳第三十八	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
109 俗宦傳第三十九	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
110 姦臣傳第四十	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
111 姦臣傳第四十一	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
112 列傳第四十二 逆臣上	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
113 列傳第四十三 逆臣中	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
114 列傳第四十四 逆臣下	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
115 二國外記四十五	11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
116 國語解第四十六	25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

參考文獻

【出版社名、叢書名、書名略稱】

北商 = 北京：商務印書館

國圖 = 北京：國家圖書館出版社

上古 = 上海：上海古籍出版社

中書 = 北京：中華書局

〈清人〉 = 〈清人書目題跋叢刊〉中書，1-5：1990年，6-9：1993年，10：1995年

〈圖資〉 = 〈圖書館學與資訊科學論文叢刊〉臺北：漢美圖書

『公藏』 = 『明清以來公藏書目彙刊』北京：北京圖書館出版社，2008年

『著藏』 = 『中國著名藏書家書目彙刊』北商，2005年

【書目、題跋、圖錄】

『八千卷樓藏書志』〔清〕丁丙〔撰〕，ハーバード燕京圖書館藏清光緒間鈔本。

『八千卷樓書目』丁立中〔編〕，民國12年（1923）錢塘丁氏排印本（國圖，2009年影印；〈浙江文叢〉曹海花〔點校〕，杭州：浙江古籍出版社，2016年點校）。

『北京圖書館古籍善本書目』北京圖書館〔編〕，北京：書目文獻出版社，1987年。

『北京圖書館善本書目』北京圖書館善本部〔編〕，1959年北京中華書局排印本。

『甬宋樓藏書志』〔清〕陸心源〔編〕，光緒8年（1882）歸安陸氏十萬卷樓刊本（〈清人〉1影印；〈浙江文叢〉許靜波〔點校〕，杭州：浙江古籍出版社，2016年點校）。

『益山書影』柳詒徵〔輯〕，民國17年（1928）國學圖書館刊本（〈珍稀古籍書影叢刊之二〉北京：北京圖書館出版社，2003年影印）。

『常熟翁氏藏書記』翁之憲〔撰〕，1948年手寫本（『常熟翁氏藏書志』〈書目題跋叢書〉翁以鈞〔整理〕，中書，2022年點校本に據る）。

『重慶圖書館古籍善查查登記目錄』同書編委會〔編〕，國圖，2017年。

『傳書堂藏善本書志』王國維〔撰〕，密韻樓寫本（臺北：藝文印書館，1974年影印；『傳書堂藏書志』〈中國歷代書目題跋叢書〉第4輯，王亮〔整理〕，上古，2014年點校）。

『傳書堂藏書志』王國維〔撰〕，中國國家圖書館藏手稿本（國圖，2010年影印）。

『傳書堂善本書目』蔣汝藻〔撰〕，中國國家圖書館藏民國間鈔本（『著藏』近代卷30影印）。

『傳書堂書目』蔣汝藻〔撰〕，中國國家圖書館藏民國間鈔本（『著藏』近代卷31影印）。

『第二批國家珍貴古籍名錄圖錄』中國國家圖書館、中國國家古籍保護中心〔編〕，國圖，2010年。

『第三批國家珍貴古籍名錄圖錄』中國國家圖書館、中國國家古籍保護中心〔編〕，國圖，2012年。

『第一批國家珍貴古籍名錄圖錄』中國國家圖書館、中國國家古籍保護中心〔編〕，國圖，2008年。

『國家圖書館古籍善查查登記目錄』同書編委會〔編〕，國圖，2015年。

『國立北平圖書館善本書目』趙萬里〔撰集〕，民國22年（1933）國立北平圖書館刊本（北京：人民文學出版社，2011年影印）。

『國立中央圖書館典藏國立北平圖書館善本書目』國立中央圖書館〔編〕，臺北：國立中央圖書館，1969年。

『國立中央圖書館善本書目（增訂本）』國立中央圖書館〔編〕，臺北：國立中央圖書館，1967年。

『涵芬樓燼餘書錄』商務印書館〔編〕〔張元濟〔撰〕〕，1951年上海商務印書館排印本（〈中國歷代書目題跋叢書〉張人鳳〔整理〕，上古，2022年點校）。

『華鄂堂讀書小識』葉啓發〔撰〕，民國34年（1945）稿本（『二葉書錄』〈中國歷代書目題跋叢書〉

- 第4輯，李軍 [整理]，上古，2014年點校本に據る)。
- 『湖南圖書館古籍線裝書目錄』湖南圖書館 [編]，北京：線裝書局，2007年。
- 『江南圖書館善本書目』〔清〕王懋鎔 [初校]，南洋印刷廠排印本。
- 『江蘇第二批國家珍貴古籍名錄圖錄』江蘇省文化廳、江蘇省古籍保護中心 [編]，南京：鳳凰出版社，2010年。
- 『江蘇第一圖書館覆校善本書目』胡宗武、梁公約 [撰]，民國7年(1918)排印本。
- 『京師圖書館善本簡明書目』江瀚 [重編]，慶應義塾大學斯道文庫藏民國2年(1913)自筆稿本(高橋智2012翻刻)。
- 『京師圖書館善本簡明書目』〔王懋鎔 [編]〕，民國2年(1913)『教育部編纂處月刊』第1卷第5, 6, 8, 9, 10册排印本。
- 『京師圖書館善本簡明書目』夏曾佑 [編]，民國5年(1916)京師圖書館排印本。
- 『舊京書影』倉石武四郎 [編拍]，1929年攝影，私製：『舊京書影提要』橋川時雄 [編]，北京文字同盟社『文字同盟』第24, 25號合刊排印本(北京：人民文學出版社，2011年影印)。
- 『南京圖書館古籍善查登記目錄』同書編委會 [編]，國圖，2019年。
- 『內閣庫存殘書目』劉啓瑞 [編]，中國國家圖書館藏民國7年(1918)鈔本(『公藏』第7册影印)；北京大學圖書館藏自筆稿本(高橋智2011，蘇揚劍2013翻刻)。
- 『濮陽蒲汀李先生家藏目錄』〔明〕李廷相 [撰]，清宣統2年(1910)上虞羅氏〈玉簡齋叢書〉刊本(『著藏』明清卷1影印)。
- 『清學部圖書館善本書目』繆荃孫 [編]，民國元年(1912)上海國粹學報社『古學彙刊』第1集排印本(『繆荃孫全集』目錄1，南京：鳳凰出版社，2013年點校)；中國國家圖書館藏自筆稿殘本(『公藏』第7册影印)。
- 『堯圃藏書題識』〔清〕黃丕烈 [撰]，繆荃孫、章鈺、吳昌綬 [輯]，民國8年(1919)江寧金陵書局刊本(〈清人〉6影印；『黃丕烈藏書題跋集』上古，2013年點校)。
- 『堯圃藏書題識續錄』〔清〕黃丕烈 [撰]，王大隆 [輯]，民國22年(1933)秀水王氏學禮齋刊本(〈清人〉6影印；『黃丕烈藏書題跋集』上古，2013年點校)。
- 『堯圃藏書題識再續錄』〔清〕黃丕烈 [撰]，王大隆 [輯]，民國29年(1940)秀水王氏學禮齋刊本(〈清人〉6影印；『黃丕烈藏書題跋集』上古，2013年點校)。
- 『靜嘉堂秘籍志』河田巖 [編]，東京：宇賀正躬，1917-19年。
- 『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』靜嘉堂文庫 [編]，東京：靜嘉堂文庫，1930年。
- 『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』靜嘉堂文庫 [編]，東京：汲古書院，1992年。
- 『善本書室藏書志』〔清〕丁丙 [撰]，清光緒27年(1901)錢塘丁氏刊本(〈清人〉2影印；〈浙江文叢〉曹海花 [點校]，杭州：浙江古籍出版社，2016年點校)。
- 『山西博物院古籍善本圖目』山西博物院 [編著]，國圖，2017年。
- 『上海圖書館善本書目』上海圖書館 [編]，1957年上海圖書館排印本。
- 『拾經樓袖書錄』葉啓勳 [撰]，民國26年(1937)長沙葉氏拾經樓排印本(『二葉書錄』〈中國歷代書目題跋叢書〉第4輯，李軍 [整理]，上古，2014年點校本に據る)。
- 『士禮居藏書題跋補錄』〔清〕黃丕烈 [撰]，李文禛 [輯]，民國18年(1929)大興李氏冷雪盦排印本(〈清人〉6影印；『黃丕烈藏書題跋集』上古，2013年點校)。
- 『士禮居藏書題跋記』〔清〕黃丕烈 [撰]，〔清〕潘祖蔭 [輯]，清光緒10年(1884)吳縣潘氏滂喜齋刊本(揚州：江蘇廣陵古籍刻印社，1985年影印；北京：書目文獻出版社，1989年點校)。
- 『士禮居藏書題跋記續』〔清〕黃丕烈 [撰]，〔清〕繆荃孫 [輯]，清光緒22年(1896)元和江氏刊本(揚州：江蘇廣陵古籍刻印社，1985年影印)。

- 『士禮居藏書題跋再續記』〔清〕黃丕烈〔撰〕，繆荃孫〔輯〕，民國元年（1912）上海國粹學報社『古學彙刊』第1集排印本。
- 『雙鑑樓善本書目』傅增湘〔撰〕，民國18年（1929）江安傅氏藏園刊本（『著藏』近代卷28影印）。
- 『天理圖書館稀書目錄：和漢書之部 第四』〈天理圖書館叢書〉第四十三輯，天理大學附屬天理圖書館〔編〕，天理：天理大學出版部，1998年。
- 『鐵琴銅劍樓藏書目錄』〔清〕瞿鏞〔撰〕，清光緒23年（1897）武進董氏誦芬室刊本；光緒24年（1898）常熟瞿氏家塾刊本（〈清人〉3影印；瞿果行〔標點〕，瞿鳳起〔覆校〕，上古，2000年點校）。
- 『鐵琴銅劍樓藏宋元本書目』〔清〕瞿鏞〔撰〕，〔清〕江標〔輯〕，清光緒23年（1897）元和江氏〈江刻書目三種〉刊本（『著藏』近代卷5影印）。
- 『鐵琴銅劍樓宋金元本書影』瞿啓甲〔編〕，民國11年（1922）常熟瞿氏石印本（『鐵琴銅劍樓書影』〈珍稀古籍書影叢刊之一〉北京：北京圖書館出版社，2003年影印）。
- 『文求堂善本書目』〔田中慶太郎〔編〕〕，東京：文求堂書店，1930年。
- 『藝風藏書記』〔清〕繆荃孫〔撰〕，清光緒27年（1901）江陰繆氏刊本（〈清人〉7影印；〈中國歷代書目題跋叢書〉第2輯，黃明、楊同甫〔標點〕，上古，2007年點校）。
- 『儀顧堂續跋』〔清〕陸心源〔撰〕，清光緒18年（1892）歸安陸氏〈潛園總集〉刊本（〈清人〉2影印；『儀顧堂書目題跋彙編』〈書目題跋叢書〉馮惠民〔整理〕，中書，2009年點校）。
- 『藝芸書舍書目』〔清〕汪士鐘〔撰〕，中國國家圖書館藏清鈔本（善本書號03027）。
- 『藝芸書舍宋元本書目』〔清〕汪士鐘〔撰〕，清同治12年（1873）吳縣潘氏〈滂喜齋叢書〉刊本（『著藏』明清卷29影印）。
- 『中國古籍善本書目（史部）』同書編委會〔編〕〔顧廷龍〔主編〕〕，上古，1991年。

【研究論著】

- 阿部隆一（1970）「中華民國國立故宮博物院藏楊氏觀海堂善本解題：中國訪書志一」『斯道文庫論集』第9輯，1-190頁。
- 阿部隆一（1974）「中華民國國立故宮博物院藏北平圖書館宋金元版解題：中國訪書志二」『斯道文庫論集』第11輯，1-182頁。
- 阿部隆一（1976）「中華民國國立中央圖書館等藏宋金元版解題：中國訪書志三」『斯道文庫論集』第13輯，1-296頁。
- 阿部隆一（1983）『中國訪書志 增訂版』東京：汲古書院（阿部1970, 74, 76の補訂）。
- 曹培根（2008）『瞿氏鐵琴銅劍樓研究』蘇州：蘇州大學出版社。
- 曹培根（2018）「張元濟與瞿啓甲的友情及書事交往」上海圖書館〔編〕『張元濟與中華古籍保護研究』362-371頁，上古。
- 曹培根（2019）『常熟翁氏藏書研究』揚州：廣陵書社。
- 陳乃乾（1943）「上海書林夢憶錄」『古今』第20, 21, 27, 28, 30期（『陳乃乾文集』上册，1-15頁，國圖，2009年）。
- 馮家昇（1933）「遼史初校」『遼史源流考與遼史初校』〈燕京學報專號之五〉北平：哈佛燕京學社（『遼史證誤三種』75-334頁，中書，1959年再錄）。
- 谷錦秋（2018）「古籍圖書的整理、研究與保護——以山西博物院圖書館工作為例」『文物春秋』2018年增刊，75-77頁。
- 國立北平圖書館（1934）「本館新舊善本書目異同表」『國立北平圖書館館刊』第8卷第1, 2, 4號（『舊京書影；北平圖書館善本書目』911-987頁，北京：人民文學出版社，2011年再錄）。
- 江蘇省立國學圖書館〔編〕（1935）『江蘇省立國學圖書館概況』南京：江蘇省立國學圖書館。

- 藍文欽 (1991) 『鐵琴銅劍樓藏書研究』〈圖資〉第 2 輯。
- 李致忠 [主編] (2009a) 『中國國家圖書館館史 (1909-2009)』國圖。
- 李致忠 [主編] (2009b) 『中國國家圖書館百年紀事 (1909-2009)』國圖。
- 林淑玲 (2005) 『陸心源及其《皕宋樓藏書志》史部宋刊本研究』〈古典文獻研究輯刊初編〉第 24, 25 冊, 永和: 花木蘭文化工作坊。
- 林振岳 (2015) 「繆荃孫《清學部圖書館善本書目》編纂考」『文獻』2015 年第 4 期, 38-47 頁。
- 林振岳 (2022) 『內閣大庫藏書研究』北京: 中國社會科學出版社。
- 林振岳 (2023) 「重探《京師圖書館善本簡明書目》——王懋鎔本編纂史鉤沉」『圖書資訊學刊』第 21 卷第 1 期, 169-194 頁。
- 劉浦江 (2015) 「中華書局點校本《遼史》修訂前言」『唐宋歷史評論』第 1 輯, 157-170 頁。
- 長澤規矩也 (1942) 「明初刊本五種」野口信二 [編] 『積翠先生華甲壽記念論纂』101-106 頁, 東京: 積翠先生華甲壽記念會 (『長澤規矩也著作集 第三卷 宋元版の研究』331-335 頁, 東京: 汲古書院, 1983 年再錄)。
- 長澤規矩也、薄井恭一 (1941) 「稿本八千卷樓藏書志について」『書誌學』第 17 卷第 2 號 (『長澤規矩也著作集 4: 藏書書目・書誌學史』44-65 頁, 東京: 汲古書院, 1992 年再錄)。
- 尾崎康 (1982) 「宋元刊南北史・七史および隋書について (上)」『斯道文庫論集』第 19 輯, 193-220 頁。
- 尾崎康 (1985) 「元刊宋史・遼史・金史について」慶應義塾大學東洋史研究室 [編] 『西と東と: 前嶋信次先生追悼論文集』295-315 頁, 東京: 汲古書院。
- 尾崎康 (1989) 『正史宋元版の研究』東京: 汲古書院。
- 尾崎康 (1996) 「上海圖書館藏宋元版解題 史部 (一)」『斯道文庫論集』第 31 輯, 1-45 頁。
- 尾崎康 [著], 喬秀岩、王鏗 [編譯] (2018) 『正史宋元版之研究』中書。
- 任文彪 (2016) 「《金史》版本源流考」『國家圖書館館刊』105 年第 1 期, 147-176 頁 (聶激萌、陳爽 [編] 『版本源流與正史校勘』271-302 頁, 中書, 2019 年再錄)。
- 上海圖書館 [編] (2017) 『上海圖書館藏張元濟往來信札』國圖。
- 商務印書館 (1930) 『百衲本二十四史預約樣本』上海: 商務印書館。
- 商務印書館 (1933) 『百衲本二十四史影印描潤始末記』上海: 商務印書館。
- 商務印書館 (1934) 『百衲本二十四史預約樣本 (重訂本)』上海: 商務印書館。
- 商務印書館 [編] (1983) 『張元濟傅增湘論書尺牘』北商。
- 商務印書館 [編] (1997) 『商務印書館百年大事記』北商。
- 商務印書館善後辦事處 [編] (1932) 『上海商務印書館被燬記』上海: 商務印書館 (2016 年再版)。
- 沈津 (2018) 「張元濟與《涵芬樓燼餘書錄》」上海圖書館 [編] 『張元濟與中華古籍保護研究』19-52 頁, 上古。
- 沈新民 (1991) 『清丁丙及其善本書室藏書志研究』〈圖資〉第 2 輯。
- 島田翰 (1907) 『皕宋樓藏書源流攷』武進董康京師刊本 (北京: 九州出版社, 2020 年影印)。
- 石祥 (2021) 『八千卷樓書事新考』上海: 中西書局 (原題『杭州丁氏八千卷樓書事新考』上古, 2011 年)。
- 蘇揚劍 [整理] (2013) 「北京大學藏《內閣庫存書目》三種」『中國典籍與文化論叢』第 15 輯, 324-412 頁。
- 蘇枕書 (2018) 「傅增湘舊藏在日本」『掌故』第 3 集, 111-131 頁 (『歲華一枝: 京都讀書散記』163-182 頁, 中書, 2019 年)。
- 高橋智 (2010) 「顧廷龍批注『涵芬樓燼餘書錄』: 中國版本學資料研究」『斯道文庫論集』第 45 輯,

1-36 頁.

高橋智 (2011) 「内閣庫存書目について：中國版本學資料研究」『斯道文庫論集』第 46 輯, 269-318 頁.

高橋智 (2012) 「京師圖書館善本簡明書目・稿本について：中國版本學資料研究」『斯道文庫論集』第 47 輯, 1-87 頁.

肖君 (2017) 「山西博物院傅增湘收藏善本概述」『文物世界』2017 年第 1 期, 49-52 頁.

徐凱凱 (2015) 「由鑑藏印看明初晉府之書畫收藏」『美苑』2015 年第 5 期, 66-71 頁.

楊洪升 (2009) 『繆荃孫研究』上古.

楊家駱 [主編] (1973) 『遼史彙編』第 1 冊, 臺北：鼎文書局.

張碧惠 (1991) 『晚清藏書家繆荃孫研究』〈圖資〉第 2 輯.

張人鳳 [編] (2003) 『張元濟古籍書目序跋彙編』北商.

張樹年、張人鳳 [編] (1997) 『張元濟書札 (增訂本)』北商.

張元濟 (1938) 『校史隨筆』長沙：商務印書館 (張樹年、張人鳳 [導讀], 上古, 1998 年).

張元濟 (2007) 『張元濟全集 第 3 卷 書信』北商.

張元濟 (2010) 『張元濟全集 第 9 卷 古籍研究著作』北商.

趙鴻謙 (1928) 「宋元本行格表」『中央大學國學圖書館第一年刊』表格 1-34 頁.

仲偉行、吳雍安、曾康 [編著] (1997) 『鐵琴銅劍樓研究文獻集』上古.

朱璟 (2017) 「明代戲曲家高濂的生卒問題新考」『浙江藝術職業學院學報』第 15 卷第 1 期, 44-49 頁.